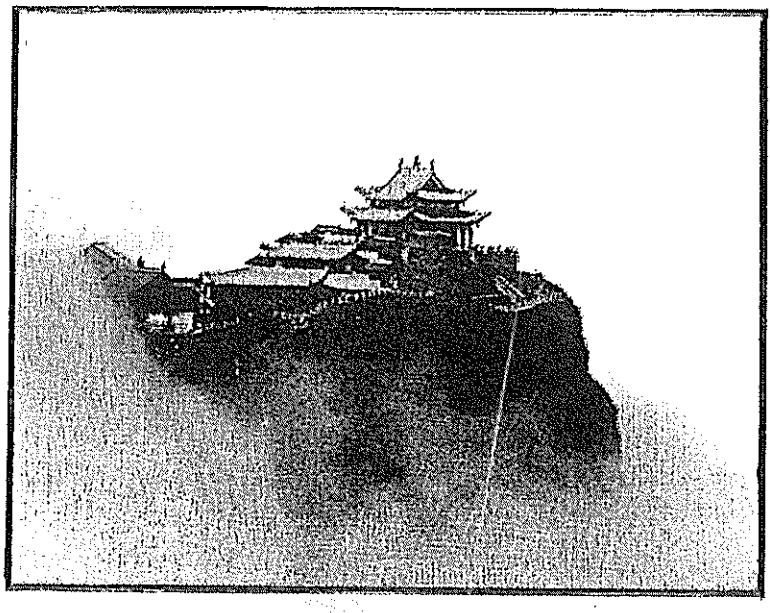
峨眉山・楽山大仏・大足石窟
成都・重慶　　四川省紀行

下の写真は峨眉山・金頂の景観



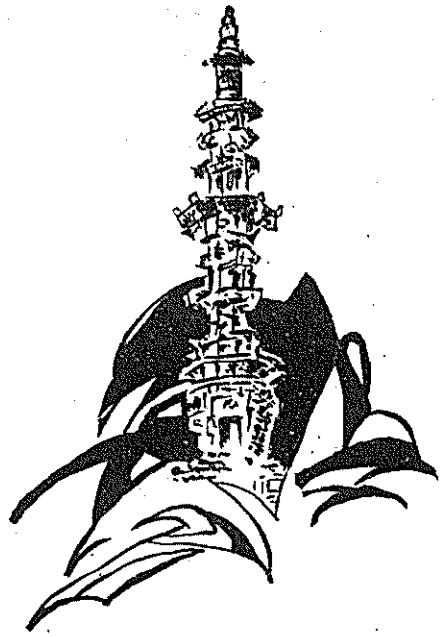
平成５年１０月５日～１０月１５日　１１日間

（１９９３年）

寺　前　信　次

「四川省の峨眉山・楽山大仏・大足石窟の旅」目次

まえがき ・・・・1
10月5日 ・・・・3
大阪～上海 ・・・・3
10月6日 ・・・・4
中国銭幣館 ・・・・4
重　慶　へ ・・・・6
10月7日 ・・・・7
重慶市内観光 ・・・・7
大　足　へ ・・・・9
10月8日 ・・・11
大足石窟の概要 ・・・11
宝頂山石窟 ・・・12
北山石窟 ・・・16
10月9日 ・・・19
大足～自貢 ・・・19
恐竜博物館 ・・・20
製塩工場 ・・・22
10月10日 ・・・23
自貢～楽山～峨眉山 ・・・23
楽山の概要 ・・・24
楽山大仏の見学 ・・・25
峨眉山麓へ ・・・2
峨眉山の概要 ・・・2
10月11日 ・・・2
峨眉山観光 ・・・2
金　頂　へ ・・・3
万　年　寺 ・・・3
10月12日 ・・・3
報　国　寺 ・・・3
三　蘇　祠 ・・・3
望江楼公園 ・・・3
成都の概要 ・・・4
10月13日 ・・・4
杜甫草堂 ・・・4
都　江　堰 ・・・4
10月14日 ・・・5
武　侯　祠 ・・・5
成都空港～上海 ・・・5
10月15日 ・・・5
上海～大阪 ・・・5
あとがき ・・・5



まえがき

「大難に死せざれば必ず福あり」という諺がある。人間には運不運が付きまとい、運は人生の一つのバロメーターだと言える。

日中戦争から第二次大戦を通じ、４年半の長きにわたって戦陣に身を投じた私は、瀕死の重傷を含めて負傷すること３回にも及び、大難に遭いながら強運に恵まれて命を拾った。

このことは、絶望して死を決意したその後の戦闘のみならず、終戦後の大苦難な人生に於ても自分の強運に一縷の望みを抱かせ、微かな自信というか、不思議な力となったことは確かであった。

７０数年の我が生涯を回顧すると決して平坦ではなく、何時も苦しみの岐路に立たされたようなものであった。生命は天からの借りもので運命を主宰するのは天だと信じ、人生航路に挑戦してきた。

しかしながら、「たけき者は遂にほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ」と平家物語に出ているように、どんなに勢いが強くとも、その勢力や運は消えるものである。「おごれる人も久しからず只春の夢」のように、２年前から両膝関節痛に悩まされてしまった。

「とにかく浮世はままならぬ」、世の中は思い通りにならないのが現実である。しかし、落ち込んでしまってはいけないと強運を信じ、あとは病が治るだけだと気を楽にして、ままならぬことが刺激となって今年８月、サハリンの旅に出た。

幸運にもサハリンに残留させられた韓国人の姿が反面教師となった。異国の地に残されてから絶望することもあったが、決して絶望を恐れてはならず、希望を捨てなければ必ず新しい人生が開けるのだと教えてくれた。

人間は人生のいろいろな体験を経て成長し、単調な人生ほど生き甲斐を失わせるものかも知れない。積極的な生き方をする意欲こそが人生を豊かにし、意思が弱く物事を断行する気力に欠けては運をつかむこともできない。

年老いても旅への想いだけは絶ち難く、我が残照の人生を思えば思うほど執念のように燃えていた。旅から学びとる博学多識の刺激は病までも忘れさせ、老い先の短いことも忘れさせる悦びがある。他人を羨むよりは自分の資質を如何に伸ばすか、その方が賢明な生き方だと悟ってきた。

確かに旅に出ると自分というものを省みるようになり、旅は孤独の中で自省する上善の策だと考えている。だから昔から失恋や苦悩に陥ると旅に出たのかもしれない。

しかし旅路は数多くて選定するのも容易ではなかった。既に中国四大仏教聖地である文殊菩薩の五台山、観音菩薩の普陀山を訪れていた私は、久恋の夢の地であった普賢菩薩の峨眉山に心が傾いていた。

観光の「観」の意味は深く、「心観」という意味もある。自分を見直して真理に一歩でも近づくためには、峨眉山が最高の魅力的なところだと考えた。

峨眉山信仰の対象である金頂（３０７７ｍ）は巍峨たる峰々が重畳し、膝関節が痛む現在の私には残念ながら不可能なことであった。しかし世の中のことは叶えられないこそ面白いのだと、諦めずに調査に乗り出した。

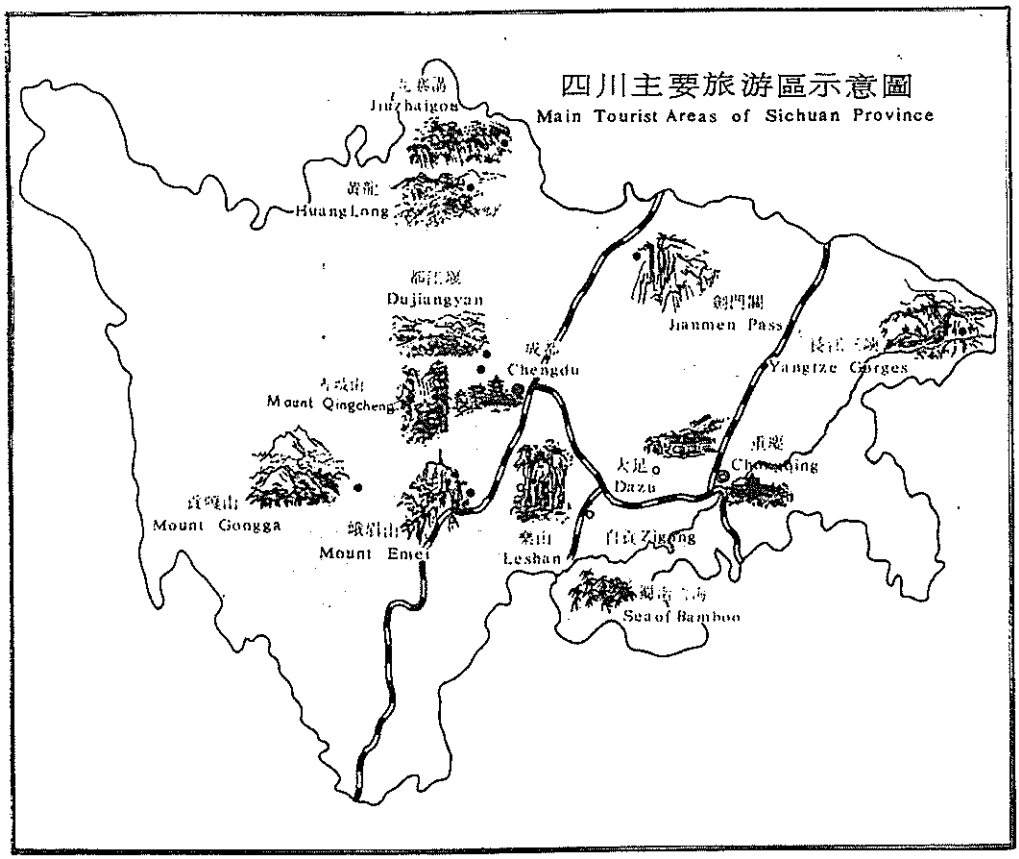
調査の結果、山麓のホテルから２時間半ばかりバスに乗車すると２４３０ｍの所に

駐車場があり、そこから約６００段の石段を登攀しなければならないが、今では駕籠があるという。以前、黄山で駕籠に乗ったことのある私には自信が湧いてきた。

駕籠を降りた２５４０ｍの地点から３０５８ｍまではケーブルがあり、残る比高差は僅か１９ｍであることが判明した。

このコースには峨眉山とともに四川省を代表する仏教霊山・大足石窟や、世界一の摩崖大仏がある楽山大仏も含まれ、「難得而易失者　時也」と、今日まで生き長らえた強運を喜びながら、深い思いを込めて参加を決意した。

下は今次旅行した四川省の概要図



１０月５日 (火) 晴 大阪～上海

ロシアでは大統領と最高会議側とが対立して闘争が発展し、最高会議ビルでは昨夜から銃撃・砲撃戦が始まり、エリチェン大統領の訪日が危ぶまれていた。

１３：３０に大阪空港に集合すると峨眉山行の参加者は１０名に過ぎず、説明会は空港内の喫茶店で行われた。自己紹介に移ると中国は７、８回から１４回も訪問し、或いは海外旅行は２８回などと自慢たらしい発言が続いていた。

旅の成果は回数によるものではなく、旅から学んだ知識と篤学心だと聞き流していた。私の海外への遠遊遍歴は５０回以上に及び、中国旅行は今回が戦後１６回目であったが、浅学非才を恥じて回数まで発表する気にはなれなかった。

バブルがはじけて日本経済が破綻している真っ最中、海外へと飛び立つ高校生の団体は数校を数え、潮騒のような喧騒の中をゲートに入った。

我々が搭乗する中国国際航空９２２便は約２時間遅れだとのアナウンスが流れたが、今回も又かと憤懣の心は湧かなかった。中国人と同様に諦めの心情（没法子）になっていたのである。

１７：３０に搭乗機は飛鴻のように舞い上がり、藍を溶かしたような海洋を瞰下しながら西の空に向かった。何時もの旅立ちと同じく乗客は、遁走症候群にかかった日本人が大半を占め、旅の武器は笑顔と御喋りだと騒々しく燥いでいた。

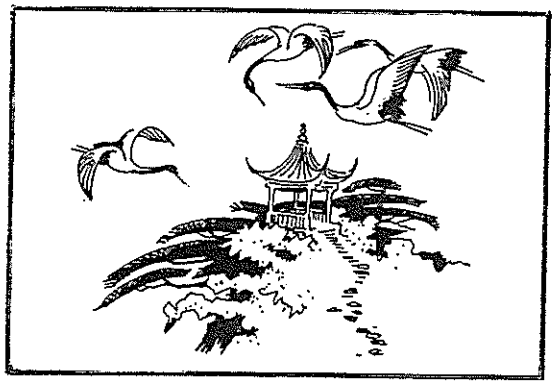
浮き草のように浮雲遊子の気持になれない私は、旅の醍醐味を深く味わい、残された人生を意義あるものにしたいと、携行してきた調査資料に目を通していた。

遥々八重の潮路を飛行した搭乗機は一瞬の快を得て、２時間半後の１８：３０（時差１時間）に上海虹橋空港に着陸した。１年４ケ月ぶりの上海空港は新築完成したものの荷物の流れが遅く、汗ばむような構内を通過するのに１時間以上を要した。

空港近くのレストランで若い姑娘のサービスを受けながら夕食を摂った。二言三言の中国語で彼女等と会話すると、私の発音が良いと御世辞が返ってきた。その魂胆は掛軸の一本でも買わせることで、商都上海らしい光景を展開し始めた。

訪中最初のホテルは空港に近い上海揚子江大酒店（ヤンズー・ニューワールド・ホテル）であった。３３階建・客室５７０のホテル（四ッ星）は新築したばかりの香港資本で、設備は良好であった。

日本と比較して暑い上海では１０月でもクーラーが入り、明日からの旅に備えて１１時に床に就いた。



１０月６日 （水）晴

早朝の４時に目覚めて入浴し、再び床に就いた。６時にまたバスにゆっくり浸ってリハリビーに念を入れ、今日の行動に備えた。

日本の日立製テレビのスイッチを入れると、北京で行われた世界陸上の模様を放映していた。２０００年のオリンピックの開催に熱烈な意欲を燃やしていた中国は、残念ながら僅か２票の差で敗れ、その悔しさを映像に発散させているように思えたが、我々の心情としては一衣帯水の中国に勝たせてやりたかった。

夜が明けるにつれて東の空は紅色に染まり、文字通りの暁紅であった。ホテル周辺は友誼商店や超高層ビルが建設中で、開放政策が功を奏し、成長率２０％という驚異的な発展ぶりは、別な世界に踏み込んだような錯覚に陥ってしまった。

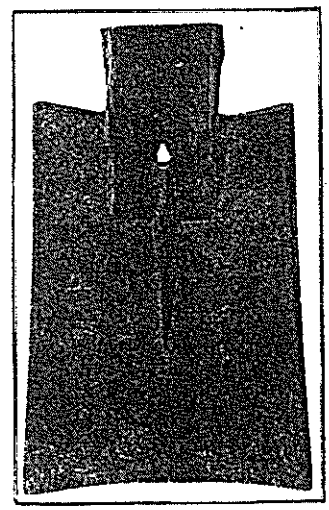
本日の予定である１７：０５発の重慶に飛ぶまでは、計画では上海市内観光となっていた。しかし観光箇所の少ない上海は全員が何回も訪れており、添乗員の配慮によって開館したばかりの「中国銭幣館」の見学となった。

中国銭幣舘

銭幣館は以前に見学した上海博物館の別館として新設されたもので、中国に対する知識の一環のためにも、見学するに価値あるものであった。

中国は世界史から見ても最も早い時代から貨幣を使った国の一つである。その起源は新石器時代の晩期（４０００年前）で一部の地域においては貝幣が交換の媒介として使用されていた。（右は商・西周の貝幣）

商（殷）・周時代以来、商品の交換の発展と社会の変革にともなって逐次金属貨幣、鋳幣、紙幣が出現し、民族的風格が形成されていった。



中国古代に長く使われた貨幣制度の中では主として銅鋳幣が最も発展し、秦の統一が達成されると方孔円銭が現われ、この貨幣は明・清時代まで続いていた。

年号が入ったのは唐時代（開元通宝）で、宋時代になって応運元宝、応運通宝、応感通宝などが発行され、幣文には時代の風貌が書かれている。

この他に銀幣、鉄鉛銭や、宋時代以降に発行された紙幣がある。これらの発展と流通は、その時代の特定的な経済や歴史的条件に関連している。

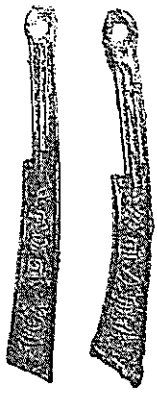
一方、漢、唐以来から外国の貨幣も中国に流入し、中国の銅銭と紙幣は近隣国家にも流通され、世界各国の紙幣が発展していった。（右は春秋時代の原始貨幣）

（以上は銭幣舘の玄関内に記載されていたものを参考としたものである）

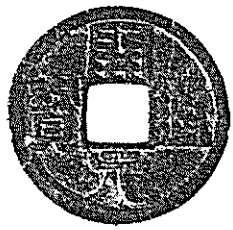
館内を静かに歩いて廻ると商（殷）・周・春秋戦国時代から、秦、漢時代と順を追って各時代の銭幣が陳列され、歴史の古さと多岐にわたる種類は他に類を見ないものばかりで、驚嘆の眼で見なければならなかった。

前頁の写真は商（紀元前１６世紀～前１１世紀）・周（前１１世紀～前７７１）時代の貝幣と、周・春秋戦国時代の大きな鍬型をした銅製の貨幣で、後者は初めて目にした珍しいものであった。

①



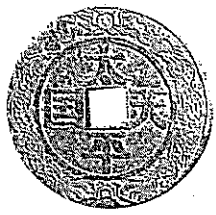
②



③

④

⑤



⑥

①戦国時代（前４７５～前２２１）の刀型青銅製貨幣
　時代が若くなるにつれて貨幣は小型となってくるが
　流通が盛んであったことを意味していた。
②唐（５８１～９０７）開元通宝で年号がある方孔銭
③北宋（９６０～１１２６）時代の感応通宝
④我々もよく見かけたた清（１６４４～１９１１）時代の乾隆通宝
⑤珍しい太平天国（１８５１～１８６４）の貨銭で、発行されていたのである。
⑥清時代に甘粛省で発行されていた紙幣
　上の中国の貨幣の他、日本の１円金貨など諸外国通貨も展示されていた。

これほど多くの通貨を展示したところの見学は初めてのことで、中国の歴史の偉大さに圧倒されながら銭幣舘を去った。毎回同じようなコースの予園を訪れたが、私は園内には入らずに漢方薬の店を覗いていた。中国の運動選手が服用しているという「夏草冬虫」に初めてお目にかかったが、物価の高騰に驚くばかりであった。
次いで何時もの工芸展覧館に廻り、市内のレストランで昼食を終え、重慶へ飛ぶために上海虹橋空港へと向かった。

重　慶　へ

１７：０５発の東方航空４５４４便は定刻に上海空港を浮揚し、滞空時間約２時間２０分の重慶へと飛翔疾駆した。

機窓を覗くと空は深海のようにあくまでも青く、時々千切れ雲が飛ぶように舞っていた。黄一色の茫漠とした江南の平野の中に、悠揚迫らず、大陸を西から東へゆっくりと流れる長江の大河が、蛇行を重ねて淡い光を放っていた。

初秋が夏を連れ戻してきたような快適な大気の中で、文字通り天に昇った感じの怠惰な幸せを味わいながら、６年前に訪れた重慶の記憶の糸をたぐっていた。

累々として重なりあった不気味な山岳の景観に視線を投げていた。空は次第に闇に包まれて漆黒の世界に変わり、夜空に浮かんだ星だけが燦めき始めた。

上海～重慶間は船舶で７日間、急行列車で２泊３日を要する。しかし雲上に浮かぶ一粒の粟に似た機は早や重慶上空に達し、高度を下げて着陸体勢に入った。

７：３０に重慶空港に到着したものの、記憶に残るものは全くない。それはそのはず、名物の霧を避けるため、山の頂上に空港を建設したのであった。

「蜀道の難きは青天に登るよりも難し」と李白の詠んだ光景は消え去り、有料高速道路を突っ走って４０分後に市内に入っていた。

世界最大の人口を誇る重慶市は１３００万の大都市で、都市部の人口は５０万である。中国の軍需産業は四川省などの奥地に集中し、重慶は今では中国有数の工業都市に発展した。その影響をうけた街並みは煌々と照明が輝き、隔世の感がしていた。

坂の町の重慶では自転車は使えず、市民は専ら市営バスと軽自動車のタクシーを利用し、そのため車がひきめき合って大渋滞であった。

市の中心部は三方を河川に囲まれ、半島のような形をしているから「山城」とも呼ばれるが、渋滞の解消は地下道を造る以外には解決策はないようだ。

バスの運転手の特別サービスにより枇杷山の夜景の見学となった。嘉陽江大橋を渡って急坂を登り、左に急カーブを切ると６年前の記憶が蘇ってきた。山腹に関羽像があり、石段を登ると博物館の筈だが、ライトの明りだけでは見分けができない。

枇杷山の頂上に立った楼閣は明瞭に私の脳裡に刻まれていた。通訳の逍氏はこの夜景は１００万ドルに及ばないが、５０万ドルの値がすると吹聴した。ネオンが煌めくまでに発展した市街に驚嘆の目を向けると、そこにはアベックの姿までが目に止まり、物心ともに急成長していたのである。

山を降りて山麓のレストランで夕食を摂ると、直ぐ私の目に止まったのは一幅の「貂蝉」の画であった。傾国の美女・貂蝉を董卓と呂布とが決死で奪い合った恋物語は、三国志の中でも有名だ。生涯のうちで一度でもよいから、このような恋をすればさぞかし満足であろう。

夕食を終えた一行は爛々として照明に輝く長江大橋を渡り、長蛇の列をなす自動車で渋滞するトンネルを通り抜けた。以前には大橋の南側は閑散として何もなく、長足に発展した景観に目を奪われながら、ホリディ・イン・ホテルに着いた。

天然ガスの発見は、夜間を昼間に置き換えるほど容貌を一変させ、天空に聳える高層ホテルは煌々として辺りを睥睨していた。しかし何時待て経っても部屋割りが決ま

らない。

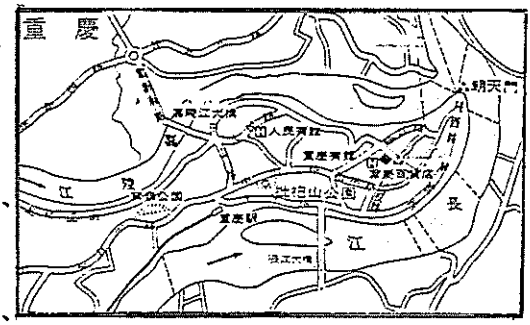
前の中国国家主席で軍の長老であった楊尚昆氏が大足石窟を訪れ、強引にその随員までもが最高級ホテルに割り込み、定員をオーバーして我々外国人まで締め出されそうな状況となっていた。

唾棄すべきは権力者の独善的な横暴思想である。日本の政治家には錬金術しか考えない不心得者が多いが、共産国の独裁政権下では、常識では理解できない不埒千万な行動を採るものだ。

権力は腐敗すると忿懣やるかたない思いで待つこと１時間半、中国の実態を見せられながら、疲れ切って部屋に辿り着いた。

例の紀行文では、ここに重慶の概要を述べる習わしだが、前回の紀行文「長江三峡下りと三国志の里の旅」に詳細に亘って記載済みのため、割愛することにした。

１０月７日 （木）晴 重慶市内観光



旅を大きく左右するのは天候だと、気をもみながらカーテンを開けてみた。窓の外は「蜀犬日に吠ゆ」と言われる通り、濃い霧で覆われていた。

山が高く水に囲まれているから霧が発生し、太陽の光を見ることが少ない蜀の犬は、日の出をみて吠えたという。実に素晴らしい形容である。

霧の中を鳩の群れが輪を描いて飛び廻り、下には急成長した壮観な長江南岸の輪郭が幽かに浮かんできた。漸く悠然とした長江の流れも照らし出され、青々とした並木が薄ぼんやりと顔を出してきた。

９時にホテルを出発して三国志の心の古里の旅が始まった。急速に歴史の速度を倍加した発展ぶりは、懐かしい歴史絵巻の古都を自動車の大混雑の姿に変えてしまった。

臭い排気ガスの充満したトンネルを通過して、重慶長江大橋の南端にバスは停車した。帯のように続く車の渋滞の中での写真撮影は容易でなく、押し寄せてくる物売りもまた想像できなかった光景である。

大橋の下に見える中州（地図参照）は、辻政信氏が重慶に潜入したときの飛行場の跡である。その向う側の北岸にもまた高層建築が櫛の歯のように林立し、開発がバラ色の夢を描くように変貌していた。

薄陽のさす中を枇杷山を眺めながら、長江沿いの街路を東へ進んだ。至る所に点在していた戦時中の防空壕は店舗となり、深閑としていた弾丸黒子のような一帯も、商魂たくましい町となっていた。

頭の中に埋もれていた記憶を探し求めていると、担ぎ屋が街角に屯している姿が目に映った。坂の町・重　慶では品物を天秤棒で運ぶ商売が盛んで、この光景だけは昔も今も変わ

らずに受け継がれていた。（前頁の下の写真は天秤棒の担ぎ屋）

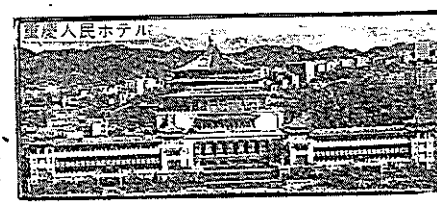
晴れ上がった空は紺碧に澄み渡って雲一つ無く、平和な曙光が満ち溢れている街を通り抜け、バスは朝天門の坂の上で停まった。しかし長江三峡下りで乗船した桟橋は寂れ果て、今は観光船の発着場は下流に移って荷物だけの埠頭となり、殷賑を極めた面影は消えてしまった。時代の流れであろうか。

重慶の名は宋時代に始まり、明時代に造った城内と城外とを結ぶ門の１つが朝天門である。満々と濁流を盛り上げながら、悠久の歴史を秘めて流れる長江と嘉陽江、その合流点が朝天門の埠頭であった。

急坂の中腹にあった金竹寺跡の展望台からの眺めは、「美なる哉、水、洋々たり」の景観である。河の流れも人間の流れも同様に、親の代、子の代、孫の代と遷り変り、戦乱の時代もあれば、自然の大災害に傷いた時もあっただろう、と眺めていた。

懐かしい想い出に再び巡り合った感懐が、次々と湧き水のように湧いてくる思いは押さえ切れず、情緒豊かな山水に釘付けされてしまった。更に歴史が作り上げた三峡下りの風光に、欲張って再度挑戦してみたいと熱くなってきた。

朝天門を離れて嘉陽江に沿った街路を西に進むと、前に泊まった重慶飯店や、六神丸を買った中央広場が見えていた。実に懐かしい。旅の楽しみは新しいものとの出会いだけではなさそうである。



前回は正面から眺めるだけだった重慶人民賓舘は、今回も暫く下車して写真撮影するだけとなった。

北京の天壇を模して作った極彩色の人民賓舘は、今では１００階建てのビルの建設に着手した重慶では、影が薄くなってしまった。

（上の写真は１９５３年に建築した、会議場とホテルになっている重慶人民賓舘）

今日も再び枇杷山に登るのかと思っていると、バスは山腹の重慶市博物館の前で停車した。記憶が蘇えり、恐竜が３匹も展示された博物館は忘れられない。しかし楠木をくり抜いた船棺（秦代のもの）は記憶になく、蜀の先住民族の風俗習慣を新ためて脳裡に刻んだ。

バスは先刻から見えていた中央広場に引返し、ごみごみした路地裏のレストランで昼食となった。珍しくもない日本人を穴の開くほど見詰めている群衆の中に、長い棒の先に白いローラのようなものを取り付け、目当てもなく屯していた左官屋が目に留まった。（右は左官屋の一群）

いつ仕事にあり付けるか分からないが、何とかなるだろうと根気よく腰を下ろして待機する慢々的な光景は、急成長を続ける重慶には似合わない。しかし、これが古代からの中国人の非能率的な実態であった。

近年の中国では沿海地方や大都市の経済発展は素晴らしい。それに反して地方の農村経済は不振で、その収入格差は１：６と言われている。農閑期になると２億近い農民が、職を求めて都会に殺到するが、彼らはその盲流現象かもしれない。

昼食が終わって中央広場から雑踏する街路を西に走り、重慶最後の観光地となった「鷲嶺」に登った。ここは山城と言われる市街地では最も高く、鷲の頭の形をしてい

るから鷲嶺と名付けたと言われている。

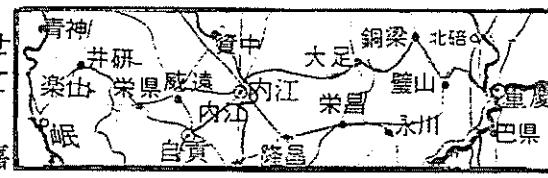
昔の大金持ちの所有地だったという鷲嶺の山頂から嘉陽江を見おろす眺望は、歳月が止まったように昔のままであった。

（右は鷲嶺から嘉陽江大橋を望む景観）

ガジュマル（漢名は榕樹）の大樹と竹の生い茂った山頂の北端に、展望台を兼ねた八層四角の塔が立っていた。その下に「渝州」（隋代の嘉陽江の呼び名で重慶のこと）の全景が見える要衝の地、と詠んだ詩が刻まれていた。

赤褐色に濁って重そうに流れる二つの大河も見納めだと目をやると、不思議なことにも新奇な興味が感じられるばかりか、四方の眺望の自然美までが感動するように眼底に映っていた。

大　足　へ



バスは２時１５分に鷲嶺を下り、魅せられる忘我陶酔の未知の世界に向かって出発した。

蒋介石の牙城だった市街地を離れて嘉陽江大橋を通過した。大足までの行程は約４時間３０分と予定された。

郊外の山並みは美しい稜線を描き、山間の農村は既に稲刈りが終わって一畝づつ田を耕す光景が続いていた。天府の国だけに野菜の栽培が盛んなようで、住宅を見ても中国では上の部類であった。

高速道路（中国の高速道路は日本と異なって人も荷車も通り、舗装しただけの道路）は建設中で延々と工事が続いていた。しかし全てが人力による慢々的な人海戦術で、遅々として捗らない状況である。

沃野を駈け抜けて行く車窓の景観は目にしみる青い草原に変化し、旅の無聊を慰めてくれるのは、時々見える松林と蓮の沼だけであった。その殺風景な街道をおんぼろバスやトラックが、交通マナーを無視して我もの顔で走っていた。

頭がバスの天井にぶつかるほど飛び上がりながら、曲がりくねった悪路の山道を通り抜けるのは、並大抵なことではなかった。路傍の所々に咲いていた黄色い糸瓜の花だけが印象的で、山村女性が化粧水を取るために植えたのであろうか。

重畳とした山を越え、下り坂となった一帯は竹林が綿々として生い茂り、漸く銅梁県（地図参照）の西泉という寒村に到着し、トイレ休憩となった。（４：４５）

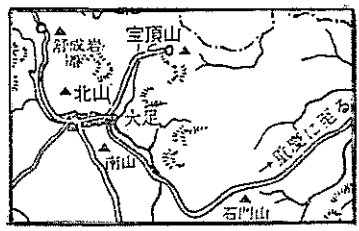
温泉が湧き出る小さな村の中央に、長さ２０ｍ、幅６ｍほどの温泉プールがあり、天真無垢な子供たちが泳ぎ回る光景を童心にかえって眺めていた。

一行の者の中には彼らに飴を与えたが絶対に受け取らなかった。その真意は判らないが、ここの子供たちは自尊心が高いのかも知れない。実に珍しいことであった。

これまでの道路事情の悪さから、中間地点のこれから先のことを思うと気が遠くなる。トラックの運転手たちも疲労のために居眠り運転するのか、２件の大事故を目撃

した。罰金の上に免許停止が待っている彼らに同情しなければならない。
一件は豚を積んだトラックが追突し、数頭の豚が路上に放り出されて死んでいた。文字通りの頓死である。他の一件は、自転車を跳ね飛ばしたトラックが民家の壁に突っ込んでいた。
平地に出たところの湖水では、網を湖底に沈め時々挙げて魚を捕る「阿呆まち」の姿が目に映った。この中国らしいのんびりした光景は実に懐かしく、それを眺めながら下校する小学生も微笑ましく見えていた。
田舎の小・中学生は５～１０㎞の距離を通学するのは珍しくない。中には２０㎞も離れた学校に通う児童もいるらしい。僻地の子供たちの向学心は旺盛で、偉くなりたい意欲は都会よりも強く、地方大学の合格率は断然高いと言われている。これも遠距離通学に鍛えられた精神力であろうか。
遥か彼方の地平線に落ちていく夕陽は、血潮のように紅く見えてきた。その光は夢の光のように静かで、強烈というものが一つもない。
灌木が生えた路傍の空地を開墾した農夫が、一鍬づつ丁寧に薩摩芋を掘っていた。収穫した芋は細く短いものばかりで、日本では全く商品価値がないものを、彼らは貴重品のように扱っていた。
（右は猫の額のような開墾地で芋を掘る農民）
星を戴いて耕し、日没して家に帰り、一日中地面ばかり見つめて暮らす姿は、中国の伝統とはいえ何一つ改善されていない。貧乏で亡んだ人はいないと、車窓から激励の言葉を掛けてやりたい心境であった。
寂寞とした村里を走るバスの正面に夕陽は赫く輝き、今まさに沈まんとするところで車は停車した。運転手は気をきかして写真撮影の適地を選んだのである。
何回足跡しても、中国を旅することは容易ではないと感じていた。国土が広いだけでなく、余りにも歴史が古いからだ。中国のどんな寒村僻地にも古い歴史が埋積し、１９３８年に発見された目標の大足石窟もその一つであった。
四川の田舎町・大足の北山賓館に５：３０に到着し旅装を解くことになった。武夷山（福建省）山麓の賓館のように、電話もない設備も悪いホテルに不平を云う者もなく、静かな憩いの場に身を横たえたのである。

１０月８日 （金）晴



６時に起床して風呂を浴びようとコックを捻ったが湯が出ない。数年来の習慣の朝風呂もままならぬと落胆していると、白いレースのカーテンの外側に見えた針葉樹が、慰めるように窓近くまで梢を伸ばしていた。

７時に漸く湯が出る。大足石窟の踏破のためにとゆっくり風呂に浸かり、丹念に膝のリハビリーをして座薬を挿入し、「一日の命、万金よりも重し」と準備万端怠りなし。そして窓を開けて冷気を吸い込んだ。

下界は四川省特有の霧が立ち籠めていたが、天頂には微かに色付いた箇所が見え、今日も快晴だと心は勇んでいた。一方、農民は薄明かりの畑で懸命に鍬を振り上げ、天府の国の裕福さは肥沃の土壌ばかりでなく、勤労意欲にあるのであった。

大足石窟の概要

大足石窟の造営は晩唐の景福元年（８９２）に始まり、南宋の末期（１３世紀）にほぼ終わる約３７０年間にわたって造られ、明・清のものは数えるほどである。石窟群は５万体もあり４０数ケ所に分布し、これらを総称して大足石窟という。

１９３８年に発見された大足石窟は僻地の山間に位置し、又、熱烈な信者の保護によって文化大革命の破壊から免れ、国務院は１９６１年に「全国重点文化保護単位」（重要文化財）に指定した。

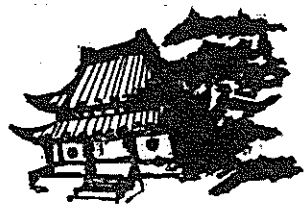
中国の仏教石窟には敦煌、雲崗、龍門などの多くの名窟があるが、それらの大部分は黄河以北に散在している。石窟といえば華北と考えていたが、四川にも大足石窟が存在していたのであった。

大足石窟は仏教の造像を主とした宗教芸術であるが、儒教と道教の造像区域もあり、儒教、仏教、道教の三教祖を同じ窟内に刻んだ区域もあって珍しい。

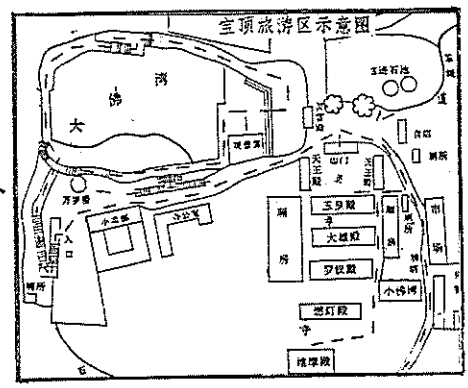
歴史の移り変りや社会活動の重点の移転、それに加えて交通の不便等により、歴代ここに足を運んだ文人は甚だ少なく、記述・著書の類は多くない。そのため千年前の古代石窟芸術の精華は奥まった秘境にしまいこまれ、長らく人に知られなかった。

大足石窟の中でも規模が大きく、集中的に石窟があるのは宝頂山と北山の摩崖像である。そして四川省には昔から「上は峨眉を朝（ハイ）し、下に宝頂を朝す」という言葉があるが、峨眉山と宝頂山は四川を代表する仏教霊山である。

大足の地名の由来は、「宝頂山にある池が枯れると、そこには釈迦が涅槃に入る前に残した巨大な足跡が現れる」、という伝説から付けられたと言われている。



宝頂山石窟（位置は前頁地図参照）



宝頂山は大足県の東北１５㎞の香山の山頂にある。９時にホテルを出発した一行はバスに乗車し、丘陵地帯を通過して山に登って行った。

「下に宝頂を朝す」と言われるだけに、道路の両側には松や翠竹が群生して景観は頗る良好、数多くの仏龕（ガン、断崖を掘って仏像などを安置する場所）も見え、仏の里という感じが充満している。

「宝頂」と刻んだ褐色の山門が頂上に立っていた。そこを通過すると直ぐ左に極彩色の朱塗りの「聖寿寺」が建ち、金光赫々として四方を照らす威容を放っていた。

聖寿寺は清の穆（ボク）宗の同治７年（１８６８）に性朝法師によってされたもので、臨済宗の寺院である。

聖寿寺を過ぎると右側に大寺院が広がり、寺院の左下に広々とした谷が見えていた。この谷が宝頂山石窟の造像が並ぶ「大仏湾」である。（上の要図参照）

宝頂山は南宋の孝宗の淳熙年間（１１７８～１１８９）に開鑿されたと言われる。

伝説によると唐末に四川省に柳居士という人がおり、この人は仏教の密宗を学んだ。四川の人々は彼を「柳本尊」と称して深く尊敬し、大仏湾の石窟２１号は柳本尊行化道場を現わしている。

柳本尊は秘密呪法を修法して、鬼怪を払い除いて疫病を治す他、柳本尊自身もあらゆる苦行にも耐えた。例えば目をえぐり、耳を斬り、臂を断ち、雪中に立ち、指を焼くなどの荒行であった。（これらは柳本尊行化道場の石窟に彫られている）

やがて柳本尊は四川の群衆と前蜀（９０１～９２５）の高祖・王建の支持を受けるようになった。

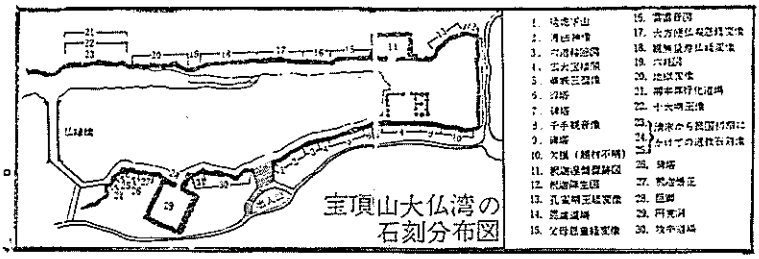
その後、南宋（１１２７～１２７９）の高宗の紹興年間（１１３１～１１６２）に趙知鳳という僧がおり、彼の出身地は大足県の米糧里であった。

彼は幼年に出家し、１６歳から各地を廻って修業すること３年、帰郷してからは「柳本尊の法旨を伝え、柳本尊の教派を立て」、宝頂山を伝教の本拠として「六代祖師伝密印」を称した。

彼は南宋の淳熙６年から淳祐９年（１１７９～１２４９）までの７０年間に資金を募り、小仏湾と大仏湾を中心にして周囲２㎞余の山々に摩崖像１万余体を刻み、中国未曾有の密教道場を創立した。

その「勢いの盛んなことは朝野を傾動せしめた」といわれ、当時の南宋の高官たちが視察に訪れている。そのため宝頂山は大いに栄え、参詣の盛況は峨眉山に匹敵し、「上は峨眉を朝し、下は宝頂を朝す」と言われたのである。

彼は淳熙年間の初めに経寿寺（聖寿寺の前身）を建立し、さらに小仏湾、大仏湾などに彫刻し、造象した。小仏湾は彼が最初に石刻群を造ったところで、大仏湾のための青写真であったようである。



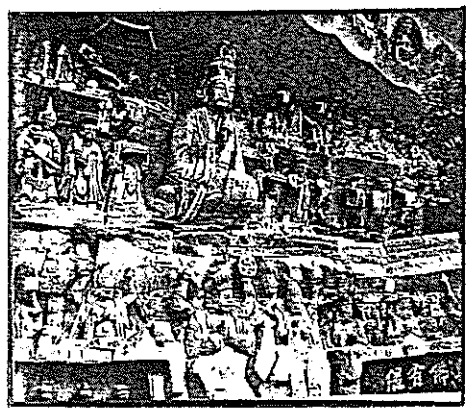
我々は教化を受ける前世からの因縁のように、眺望が開けた丘の上に立つと、目もくらむような谷底に大仏湾が展開した。

地球を包む空気の広がりを気海と呼んでいるが、この光景は仏海と呼ばなければならないほど、微かに何千という仏の姿が光るように見え出した。

大仏湾は凵形の峡谷で長さは約５００ｍ以上もある。高さ２０ｍくらいの断崖の地上４～１４ｍあたりの岸壁に、仏像１千余体が造像されている。

最も多く造像があるのは北面岸壁（上の要図の上部）で、南岸の丘の上から眺めると、大型の浮彫をおさめた巨龕がずらりと並び、実に壮観な眺めであった。

大仏湾に降りた一行は左側の道を進んだ。（上の図では２３号の方へ）



２１、２２、２３号は一つの大きな大仏龕の中にあり、前記した「柳本尊行化道場」を現わし、右下に「与仏有縁」と彫られていた。

宝頂山石窟は写真撮影が許可されないものが多く、通訳の指示により撮影しながら進んだ。

龕の中央の釈迦像を中心にして「刳眼（コウガン）」（目がえぐられても物が確認できる）、胸を焼く（無心になること）、左手を斬りとる、耳を切りとった仏像など、柳本尊が苦行して成仏した過程を物語っていた。（上の写真は苦行を表現した柳本尊行化道場の石窟群）

２０号の「地獄変相図」は３段に分かれて刻まれていた。上段は十方仏、中段は十王と地獄で、崖面の大半を占めた下段は１８層の地獄図である。

閻魔大王を始め１２の大王、鍋地獄、舌を切る地獄、臼地獄、鋸地獄など、数え切れない恐ろしい地獄の造像であった。これらを慄然として眺め、因果応報を信じる者は救われると強く感じながら、次に向かって歩を運んだ。

１８号の「観無量寿経相」は精緻で華麗な造りの浄土を現わし、善男善女に向かって「西方極楽浄土」の様子を見せている。欄干で遊ぶ子供や、満開の蓮の花から頭をのぞかせている児童の群像は、実に天真爛漫であった。

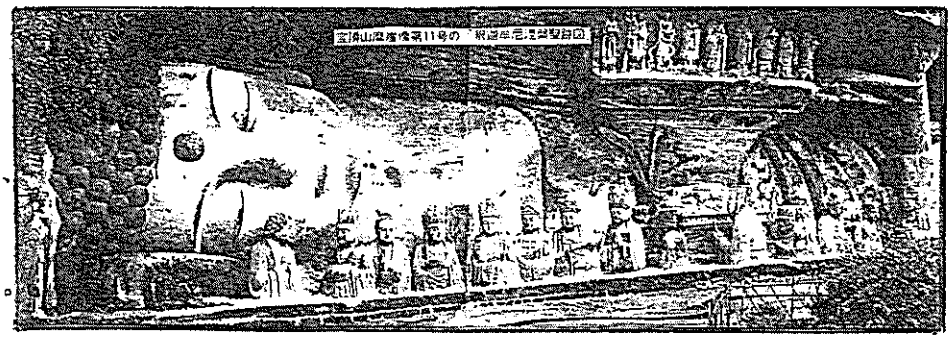
１７号の「大方便仏報恩経変相」は孝行を宣揚するものである。釈迦の孝行をきわだたせるため、左下に一組の「六師外道謗仏不孝」の大彫刻があり、釈迦が父親の死骸を担いだ孝行の像もあった。

１５号の「父母恩重経変像」は、大仏湾における生活の息吹きが濃厚な作品と言われている。仏前で子宝を求め、懐妊、臨産、授乳、洗濯、幼児の夜尿症の世話など、父母が子供を育てる過程を順を追って描写し、他では絶対に見られない造像を驚嘆の眼で見上げていた。

１２号の「釈迦降誕図」（九竜沐太子ともいう）は、大仏湾の中でも独特な意匠の

石刻である。岸壁上の池から引いた水を９匹の龍の口から、生まれたばかりの釈迦太子の上に噴きつけ、沐浴させるものである。それは生気が溢れて人の心を引き付けていた。

宝頂山は陽に映えて大仏湾の森閑とした空気は五臓六腑にしみわたり、冷爽一気、ただ仏威に打たれていると、自然に宗教は自分の心の安住の地のように感じてきた。



１１号の涅槃像は大仏湾最大の石刻であり、粛然と襟を正して拝礼した。像は頭を北、足を南、顔を西に向けて東側の崖下に横になっている。（上の写真は涅槃像）

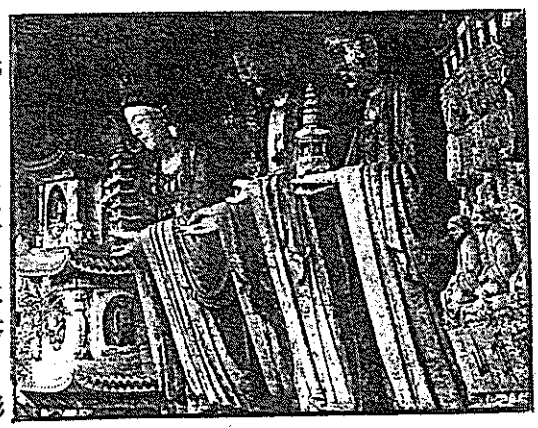
俗に臥仏と呼ばれている仏像の全長は３１ｍ、膝までしか彫刻されてなく、膝から下は岩の中にかくれている。「筆いたらずも、意いたる」の技法で、仏像の主な部分を引き立てていた。

これを彫った仏師の敬虔な崇仏の熱意と、信心に歓喜と感謝の思いを込めた含蓄の深い造像は、恰も魂のあるもののように感じるのであった。

８号は「大悲閣」と名付けた大殿宇であり、大仏湾では唯一の古代建築物である。その中には中国最大の「千手観音摩崖像」が安置されていた。

座高は３ｍに過ぎないが、その後方の８８㎡の崖面に、金色の１００７本の手が孔雀の羽のような形をして刻まれていた。そして、それぞれの手の形はすべて異なり、どの掌にも目が一つずつ入っている。

この千手観音は人気が高く、焼香者があとを絶たないと言われ、確かに大仏湾の圧巻であった。（上は１００７本の千手観音像）



仏教に「衆生病むとき菩薩も病む」という言葉がある。この観音様に「国安かれ民安かれ」という、一視同仁の慈悲を感じながら次へと進んだ。

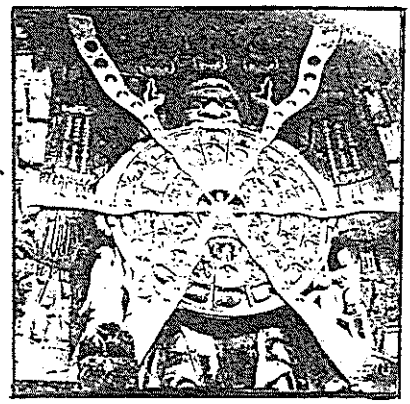
５号の「華厳三聖像」は釈迦の涅槃像に次ぐ巨像で、地面から天井までの唯一の立像であった。（右は華厳三聖像）

中央は密教の始祖「毘盧遮那仏」、左は１、２ｍも前に伸びた手に５００㎏の宝塔を載せた普賢菩薩、右は文殊菩薩である。

三聖像の高さは７ｍで、丸彫に近い浮彫

のため立体感が強い。背後の龕壁には千仏が配置され、三聖像を引き立てていた。

３号の「六道輪回図」は仏教の因果応報、輪回転世、霊魂不滅を宣揚する説教図で、生死命運のそれぞれ異なるさまざまな様子が刻まれていた。



中央の転輪王は巨輪を口にくわえて両手で支えている。巨輪の中央の仏像から六道の仏光が立ち上り、巨輪を天上、人間、修羅、畜生、餓鬼、地獄の六つの部分に分けている。

転輪王の頭上には釈迦、弥勒、阿弥陀の三世仏が並び、転輪王の下の両側には夫婦が向かい合って立ち、懐胎の因縁を表していた。

（右は巨輪を口にした転輪王の六道輪回図の像）

輪回とは輪が転がって止まることのないように、生まれ変わり死に変わって絶えることのない、迷いの世界を意味するのであろう。

人生は生と死の間の綱渡りであった過去を回顧すると、自分自身を見詰め直すことが、既に悟りの境地の一歩だと感じていた。

３０号の「牧牛図」は、牛１０頭、１０人の人間からなる１０組の像で、禅の十牛図にもとずきながら、農村の牛を放牧する情景が描き出されていた。

四川省の農村風景を見ていると、この十牛図に描かれているのと同じような光景が、田園地帯に見ることができた。幸せを約束するのは、自然のままの生き方だと教えているのであろうか。

以上で大仏湾の見学は終わった。死のような静けさの中に展開し、天竺の横町の感じがした石窟は、死を超越して戦い極限状態の苦しみを味わった私にも、仏教の信仰から生まれる心の喜び、「法悦」の一端を感じさせたようである。

宝頂山の石窟群は、宋時代の庶民生活を具体的に反映させたものであった。仏教の五戒の教えと儒教の孝の倫理を深く結び付け、想像力に富んだ雄大な迫力があるのが特徴ではないだろうか。

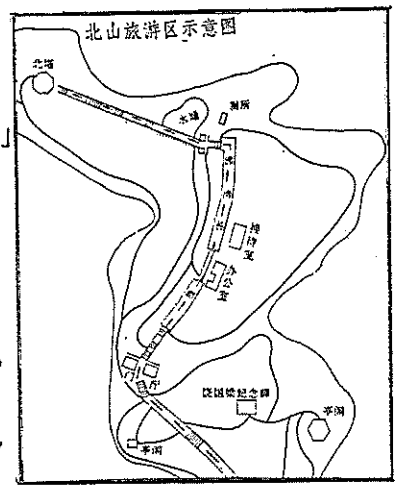
一行を乗せたバスは黄金色に包まれた仏の里を去り、仏の教えの勧善懲悪を肌に感じながら帰路についた。

突然、車は視界の開けた高台の一角で停止した。そこから日本でいう千枚田の景観が眼下に展開し、農業は大寨に学べと叫んだ毛沢東が思い出されるのであった。（上は「大足梯田」と呼ばれる千枚田の景観）

この見晴らしの素晴らしい高台に、焼酎を造る汚い小さな作業場があり、通訳は先頭に立って案内した。不潔な製造過程の説明まで聞かされ、酒に縁のない私は直ぐさま外に出た。

丘の周りの花を付けた小さな野菊に魅せられ、童女のような感動を噛み締めながら、あくまで高い澄み切った秋の空を見詰めていた。

北山石窟（位置は１１頁地図参照）



北山は古くは竜崗山と呼ばれて大足県の西北２kmにあり、海抜５６０ｍの丘が起伏した岩の連なりで、その山に開鑿されたのが北山石窟である。

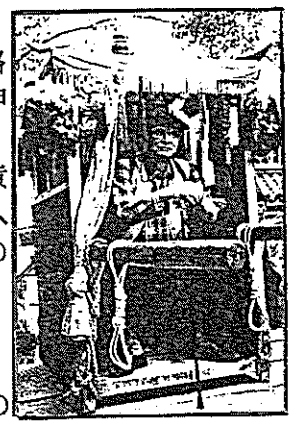
ここは唐代末期に四川東部を割拠していた「韋君靖」（地方長官）が兵を駐屯させ、糧秣を貯蔵した「永昌寨」であった。

晩唐の景福元年（８９２）、韋君靖はこの永昌寨の岸壁に造像を始めた。その後、地元の官僚、権勢家、名士、僧尼などが自費で造像をつづけ、五代を経て、南宋の紹興年間に至るまでの、約２５０年の歳月をかけて完成した。

北山の頂上部にある仏湾に山道をとりつけ、彫られた摩崖像は５００ｍに及び、石像のある龕や窟は２６４を数える。刻られた石像は１万体ちかくに達し、仏湾を中心に四方の山裾に分布している。

宝頂山が宋代以後の造像が多いのに比較して、北山石窟の造像時代は一層古く、晩唐、五代の造像が多い。又、宝頂山の造像は宋代の民衆の生活が見事に反映しているのに対し、北山石窟は仏像のみが大部分を占め、純粋な仏教信仰から造像されたものと思われる。

宝頂山の不思議な仏教文化との出会いは無意識のうちに我々を感化させ、午后は更に北山石窟の見学となった。



ホテルを２時に出発したバスは３分後に北山山麓に達した。そこには卵を岩の上から転がすような、危険極まる石段が道路を遮り、一瞬、気後れしてしまった。すると駕籠屋がどっと押し寄せ、客の争奪戦が始まった。

これも仏縁だと早速、通訳を通じて駕籠に乗った。以前、黄山で乗ったものと違って二人乗りの駕籠で、担ぐ人は前に２人後ろに２人で、非常に安定して乗り心地は悪くなく、大自然の中へ昇華して行くような気分である。

（右の写真は奇麗に飾付けのある２人乗りの駕籠）

急斜面の石段を駕籠屋は威勢のよい掛声を掛けながら登り、途中で休憩する度ごとに、ミネラルウォータなどを売る大勢の人々が駕籠を囲んだ。「不要」と云うと、駕籠屋に飲ませよと強引に迫ってくる。

初めて体験するこの光景は、文化大革命以来の大革命のようであった。人間の相手は人間であり、人に施すことは仏心に通じると、駕籠屋にジュースを買って与えた。

焼け付くような日差しがまともに頭上を襲い、ゆられゆられて漸くなだらかな山勢となった処で停った。ここは北山石窟の山門の下で、駕籠のままの参観は許されないのであった。

駕籠を降りて４０段ほどの石段を自力で登り切ると、仏教文化の薫りに満ちた仏湾が広がり、最初に目に止まったのは、造営を始めた「韋君靖」の像であった。これは蜀に降下した韋君靖の将兵が、彼を記念して後に彫ったものである。

北山長廊

韋君靖像の左に彼の勲功を称える石碑が立ち、北山の由来や、黄巣の乱の農民蜂起、晩唐の四川東部の情勢などが記載されていた。

狭い日本に生まれた者の、創造力の貧困によるのかもしれないが、この像から奥に向かって、想像を超越した長い石の廊下が延々と伸びていた。

（右は長く伸びた石の廊下）

北山石窟もまた写真撮影が許可されないものもあり、可能な限り撮影しながら進んだ。

３号の「金剛杵菩薩」、５号の「毘沙天王」、９号の「千手観音」、１０号の「釈迦仏」などは、いづれも韋君靖時代に造像されたものであった。人物の姿は端正で気宇は壮大、衣飾は簡素で晩唐の作品であった。

観音像は北山にある宋代石刻の中では珍品に属するものと言われ、有名なのは１１３号の「水月観音像」と１２５号の「数珠手観音」であった。

数珠手観音

とくに数珠手観音は、本来は落ち着いた荘厳な姿であるべきだが、この像は表情が生き生きとして衣服も華やかであった。又、姿は軽やかで艶やか、恰も美しい生活を求める若い娘のように造られている。だから俗に「媚態観音」と呼ばれている。（右は数珠手観音像）

このように今日も強く人々を引き付けている優れた作品は、明らかに仏教の束縛を破ったもので、美しい生活に対する古代石刻師の憧れを反映しているようである。

普賢像

美は幸福を約束するように感じるものの、私は八方美人ではなく八方善人が好きだと更に進むと、北山最大の石窟である１３６号の「心神車窟」であった。

この有名な石窟の奥の真中に釈迦像があり、その両脇と左右の壁に文殊、普賢、日月、宝珠、報心観音など、２０余体の菩薩像が並び、渾然一体となった造像が見られた。

古代の石刻師たちは従来の技法にこだわらず、各像の特徴によって異なった性格を与えている。そのため石像は容貌が美しく、体の均衡がとれていて衣装は華麗で、芸術性が一段と高くなっているように見えた。

例えば右の写真の普賢像は、東洋の女性のもつ健全な美しさを備えた女性菩薩に仕上げている。温順な象の背中に趺坐し、容貌は秀麗豊潤でやや伏し目、口元を僅かに細く

ひきしめ、微笑をこらえている表情を見せているが、尊厳を決して失っていない。

文殊菩薩も本来は博学多才で能弁な菩薩だが、石刻師はそれをはっきりとした男性の菩薩に仕上げ、端正で物静かな姿にして、咆哮する獅子の背に座らせていた。

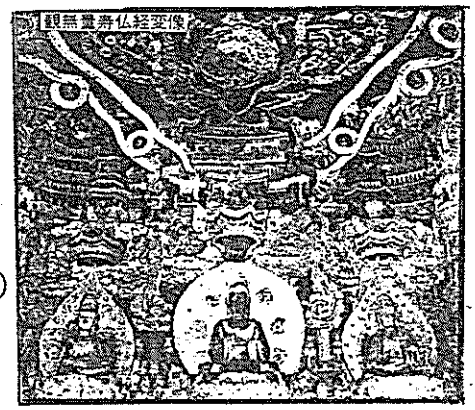
日月観音

菩薩たちの優美な顔容の中でも日月観音の顔は、豊かな頬と高い鼻、小さい口、秀でた眉と柔和な目が、端正な姿とあいまって、第一級の芸術作品のように見えていた。

（右の写真は日月観音）

知恵と慈悲に溢れた仏教精神を表現した石像を眺め、豊かな精神世界に誘われながら、２４５号の「観無量寿仏経変相窟」の前に出た。

「観無量寿仏経変相窟」は「浄土変相窟」ともいわれる最も優秀な作品である。造りが精緻、華麗で、窟内の人物６５０余体の衣飾、楽器などは、どれ一つとして晩唐の実生活の姿を表していないものはない。



上部には西天の極楽世界の状況が刻まれ、中央に阿弥陀仏、右に大勢至菩薩、左に観音菩薩が安坐し、基座に阿闍世王（アジャセ、前世の罪を表す）と１６観（仏教の真理に達する方法）の故事が彫られていた。

「頻婆娑羅王」（ビンバサラ）と「韋提希夫人」（イダイケ）が阿闍世王によって深宮に拘禁された時、仏が韋提希夫人のために「観無量寿経」を説き、極楽世界の全景を出現させ、彼女に１６種の観法を授けた。韋提希夫人が仏に接引され、西方浄土に生まれることができたと云う故事を彫ったものである。（上は観無量寿仏経変相窟の図）

上に天女と鳥が舞い、まさに極楽浄土を石窟にしたような深い安らぎを感じながら、次へと足を進めた。

続く五代の作品は、時代が疲弊していたから窟や龕は小さく、長いあいだ風雨にさらされて欠損したものが多いようだ。しかし２７３号の「千手観音」、２７９号の「薬師観音」などは保存が完全で、唐から宋への過渡期の風格を現していた。

以上で仏湾の見学は終了し、辿ってきた道を引き返すと、霊山のなだらかな稜線が秋空に映え、古色蒼然とした北塔（１６頁地図）が見えていた。

私はこれで敦煌の莫高窟、洛陽の竜門、大同の雲崗の三大石窟と、天水の麦積山と合わせて中国五大石窟を拝観した。この終生忘れ難い喜びと感動は筆舌に尽くし難く、多くの人の支えによるものと感謝しなければならない。

美しいものは永遠の悦びだと感じながら、再び去り難い思いで駕籠に乗って下山し、バスは一行を大足市の古街に運んだ。

古の大足の人たちが、金を惜しまずに投じた信仰心に敬意を表しながら散策すると、突然、欣求浄土の念仏行者が、阿弥陀如来の名号を唱えるような音楽が流れてきた。これは仏には関係なく、中国の喫茶店がサービスに音楽を流していたのであった。

人々の心の中にこそ仏の教えがあるのだと教えていた大足石窟の見学は、私に新しい活力を与えた。押さえ切れないほどの胸の高鳴りも漸く静まり、来てよかったと思いながら午後４時半に北山賓館に帰り着いた。
（大足県文物保護管理所発行「大足石窟」を一部参考とする）

１０月９日（土）晴　大足～自貢

千年このかた平和な眠りの裡にあった大足、その純粋な幻想を表現した石窟美は、紆余曲折の人生を歩んできた私にさえも、最も美しい芸術のように思わせ、お陰で昨夜は快眠が得られた。

農民は夜明け前から畑に出て野良仕事に精を出し、彼らの声で目を覚ますと鶏の鳴き声まで聞こえてきた。野戦の生活が長かった私はこの風情が好きで、久しぶりで心地よい朝を迎えた。

６時半から治療のために朝風呂を楽しんでいると、突然、電燈が消えてしまった。終戦後の日本の状態が再現され、時の流れが逆戻りしたような感じであった。

霧の中をバスは８時に出発した。大足の街角で長い竹の束を担いでいる人を見掛けると、げんのしょうこう、黍、梨、蜜柑、林檎、鶏、家鴨などを売る青空市場が見えてきた。また一方の水田では水牛が田を鋤く光景も展開していた。

大足～自貢間の１６０㎞は道路事情が悪く、約５時間はかかるだろうと予告されたが、マイクロバスの座席は少なく、私は一昨日から引き続いて最後尾の席となってしまった。

旅馴れた一行とはいえ、なんと我利我利亡者の多いことか、と毎日前の席に陣取る連中の精神状態を疑いながら、悪路との苦闘が始まった。

道路の建設工事は全く機械化がみられず、すべてが人海戦術である。僻地の農民が都会地住民との大きな収入格差に抗議して、各地で農民蜂起を耳にしているが、遅々として進捗しない道路建設も失業救済のためで、機械化できないのであった。

朝日が山野を包んで霧を追い払い、閑古鳥が鳴いている貧鄙な寒村にも陽光が照り出した。山里の素朴な生活にも今に伝える文化が存在するだろう、と想像は旅人の特権だと勝手に思いをめぐらし、ゆられにゆられて眠ってしまった。

生と死の還流のように目を開くと、どの緑もそれぞれ固有の色を輝かせ、山野の草芥の人たちは、どのようにして美しく老いていくのかと考えていた。

世の中では頭脳に刺激が少ない人ほど、幸福を感じて暮らしているのかも知れない。見実を深く考えれば考えるほど悩みや不満が出てくる。悩みや不満を余り感じないで安楽に暮らす人、頭脳に刺激を受けない人ほど幸福に見えるのであった。

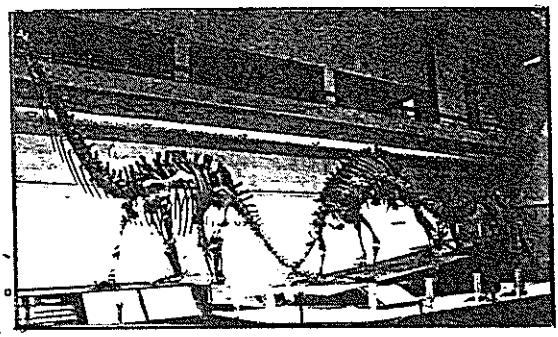
バスは砂糖の生産が盛んな自江（上図参照）の市街に入ると、天然ガスを燃料としたバスが目に付いた。日本では見られない光景だ。車の天蓋のゴム袋は天然ガスのタンクで、消費に応じて自然にすぼみ、最後は平たくなってしまう。（右は天然ガスを燃料としたバス）

自江の街を通過したが道路は依然として悪く、車は飛び跳ねるように振動して体中は疲れ果ててしまった。風にゆれる清純なコスモスだけが無聊を慰めていた。

午后３時、ようやくバスは人口４０万の四川省第３の都市「自貢」に到着し、田舎レストランで遅い昼食をとった。なんと１６０㎞の道程を７時間も経過し、時速２３㎞とは想像できないスピードであった。

自貢の「貢」は皇帝に供えるという意味で、この町では自分たちが作った特産の織物、絹糸、塩を献上したことから「自貢」と名付けたと言われている。

恐竜博物館



恐竜は中生代に陸上を支配した爬虫類で、長頸、長尾の巨体が多く、四肢は体を支える程度で、蜥坐虫類と鳥坐骨類に分類される。

前者はブロントザウルス（雷竜・約２０ｍ）、デイプロドクス（梁竜・約２９ｍ）等。後者はイグアンド（約１０ｍ）、ステゴザウルス（剣竜・約７ｍ）である。

又、肉食性と草食性とがあり、白亜紀のものは体長３５ｍ、体重７５トンに及ぶものもいた。

中生代を３分した２番目の時代、即ち今から２億１千２百万年から１億４千３百万年までの、凡そ６千９百万年の間に恐竜が生息したと言われている。

この時期は世界的に気候が温暖で生物は繁殖していた。特にシダ類、銀杏、ソテツなどの植物が繁茂し、恐竜を含む原始的な哺乳類やアンモナイト、鳥類の祖先と云われる始祖鳥も出現していた。

この恐竜博物館に展示された恐竜は、自貢市の大山舗という所で発見されたもので、その面積は約２８００㎡である。凡そ約１億６千万年前のもので、１００以上の恐竜その他が発掘されている。（重慶市博物館の恐竜は自貢からの出品）

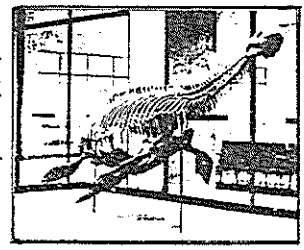
博物館の正面には「恐竜群窟世界奇観」と金文字で表示し、広場の真ん中に大アンモナイトの模型があった。博物館は町起こしの為だけではない。遺跡や文化財は人類共通の遺産、国際間の精神的な交流を図り、平和を守ろうとする意図が窺われるのであった。（上の写真は館内に展示した恐竜群の一部）

博物館は大体育館のような近代的な建物であった。内部は電光煌々として昼間のように明るく、大小２０体ほどの恐竜や恐竜の卵、その他の発掘された化石類が整然と展示されていた。

それらを眼底に映した私は、自分が今ここに居るのが不思議だという思いが込み上げ、驚異の眼を向けてカメラを構えた。しかし２０ｍ以上もある恐竜はレンズに収まらない。

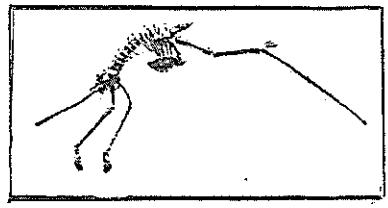
肉食恐竜、草食恐竜、鳥脚類恐竜、蜥脚類恐竜など、これほど種類の多い恐竜を一堂に展示したものは、恐らく世界でも類を見ないだろうと館内を歩いた。

その中で私は水陸両棲の恐竜を目にしたのは初めてであった。右の写真のように体に比較して大きな４っの鰭を持った体長約２ｍのもので、水陸を自由自在に棲息した恐竜の姿は実に神秘的であった。



日本では私の地元の福井県や石川県の山間から、恐竜の歯の化石を発見したと大騒ぎをしているが、矢張り大陸のスケールには兜を脱がなければならない。（右は水陸両棲恐竜）

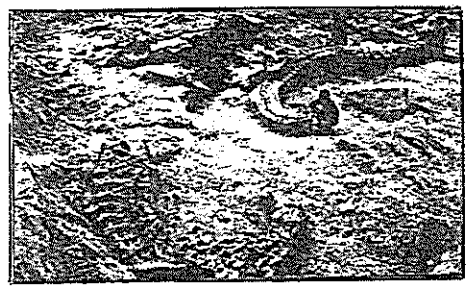
さらに驚かされたのは、空中を飛行する恐竜の存在であった。脚や尾は鶴のように細長くて胴体は小さく、首や嘴もまた同じであった。



鳥にしか考えられない全長１、４ｍの恐竜は、今にも飛び立つように見え、まさに世界の奇観と言うべきである。（右は飛行する恐竜、中国名は翼竜）

中国大陸の巨大な魅力に引き付けられ、四方八方に驚嘆の眼を振り向けながら展示館を通り抜けた。そこは自貢・大山舗の発掘現場そのままを屋根で覆い、文化財として永久保存した場所であった。

発掘現場の館内には高くなった回廊が四周に巡らされ、地表から掘り下げて深くなつた現場を、回廊から見降ろすようになっている。



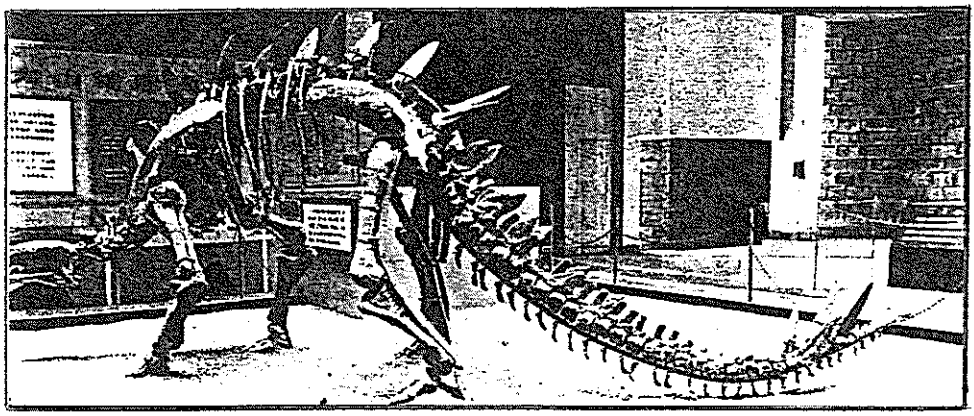
発掘地点には各々番号が付けられ、展示館に展示した各恐竜の発掘地が、一目瞭然と分かるようになっている。

規模は実に広大で化石の現場の素朴な情緒から、自然のうちに大陸の１億６千万年前の歴史が感じてくるのであった。（上は発掘現場、大きさは人間と比較すれば分かる）

これらの恐竜は、宇宙の大隕石が地球に衝突して壊滅したと言われている。それを考えると人間の命のはかなさを新ためて感じるのであった。

悪路のために自貢の到着が遅れ、それが影響して１時間に制限された博物館の見学は瞬時に終わり、立ち去り難い思いを残して館と分かれなければならなかった。

（下の写真は展示館の恐竜の一部）



製塩工場

自貢の町は恐竜の地として名声を博している他に、塩の大生産地として知られている。世界的に有名な恐竜博物館を離れた一行は、燊海井（シンカイセイ）という井戸及び塩業歴史博物館の見学へと移行した。

然し乍ら既に時間は５時を経過して門は閉まっていた。通訳は執拗に食い下がって見学の許可を依頼したが、頑として応じず、諦めなければならなかつた。経済は開放政策によって自由化に向かっているが、サービス精神は頑迷固陋な社会主義の域を一歩も出ていない。これでは世界から孤立するのではないだろうか。

塩分を含んだ井戸水から精製する自貢の塩は、すでに１０００年の歴史を持っている。深さ１０００ｍ～４０００ｍから吸い上げる井戸水は、塩分３０％というから驚異的な濃度である。又、博物館の建物は清時代の典型的なものらしく、これらを目にすることが出来なかったことは残念でたまらない。

通訳は責任を感じたのかバスを町外れに移動させ、製塩工場と交渉してその見学となった。終戦後の日本では各地に製塩工場が建設され、誰しも知っている設備のボイラなど、歯牙にかけるに足らないものを見学させられた。

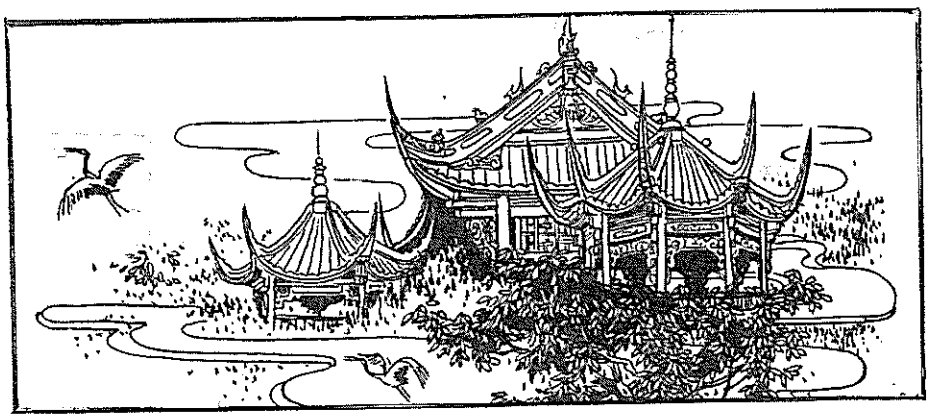
天然ガスを燃料とする工場にはパイプラインが縦横無尽に架設され、私の印象に残ったのは豊富な天然資源だけである。

見学が終わったバスの中で通訳の林氏に、現在の日本の塩はＮＡＣＬを作るのだと言うと、彼は中国語ではＮＡＣＬを「気化納」と書くと教えてくれるなど、笑いながら塩談義が始まった。

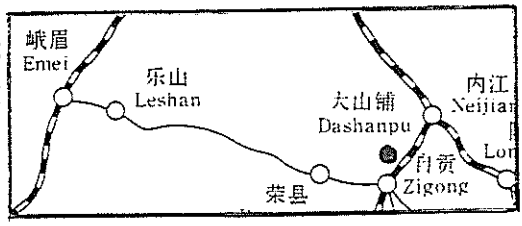
陽はすっかり西涯の野末に沈んで濃い暮色に包まれ、悪路と戦いながらの一日も漸く終わり、自貢市唯一のホテル・壇木林賓館に到着したのは７時であった。

珍しく台湾人とイスラエル人の姿も見えたが、彼らも恐竜の魅力に誘われて田舎町を訪れたのであろう。互いに笑顔を交わしながらレストランの席に着いたのである。

驚いたことに床に就くと１０月というのに蚊の襲撃を受け、マラリアの苦い経験を持つ私には神経過敏にならざるを得なかった。数多くの海外旅行ではカンボジアに次ぐ経験であり、自貢は矢張り四川省の僻地であった。早速ベープをフロントから取り寄せ、安らかに眠れば爽やかな朝がくると横臥した。



１０月１０日（日）晴～曇　自貢～楽山～峨眉



霧に包まれた東の空が淡々と明けるにつれて、ホテルの周りに広がる野にススキが涼しげに風になびき、久しぶりに日本の秋の風情が感じられた。

朝の冷気を胸の深部まで吸い込み、ホテルからやや離れたレストランで朝食を摂った。中国では珍しく牛乳のサービスがあり、毎朝牛乳を飲む習慣の私にとっては何よりの御馳走で、今日は楽々と楽山大仏参りができるような暗示を覚えた。

８時に出発したバスは自貢郊外から有料道路を走った。路肩には３本の太い天然ガスのパイプがガードレールのように走っていた。自動車の数が少ないからよいものの、交通事故で破損し爆発した時のことを想像するとぞっとする。

（右は路肩に伸びる天然ガスのパイプと農夫）

向こうに見える疎林の中には白い花を付けた樹が点々と見えていた。これがユーカリの花で何となく気品があり、秋空が一段と映えるように咲いていた。

有料道路は東の間に通過した。矢張り自貢～楽山間の１６０㎞の道路事情も依然として悪く、それに加えて七曲り八曲りの街道には無聊を慰めるものは何もない。

長山市（栄県）に差し掛かるとバスはストップした。今日は昔の双十節であった。又、日曜日とあって近郷近在の人たちが町に押し寄せ、狭い道路に開いた青空市場が車の往来を妨害していたのである。

イスラエルの連中は物珍しそうに車を降り、埃にまみれて雑踏の中を歩き出した。これも民族性であろうか。幸不幸というのは半ば気分の問題だと思っているような感じであった。

せせこましい日本人の我々は気が苛々して落ち着かず、交通マナーの悪い中国人に憤慨しながら待つこと約１時間、のろのろ運行しながら市場を通り抜けると、戸外でビリヤードを楽しむ若者の姿が目に映っていた。

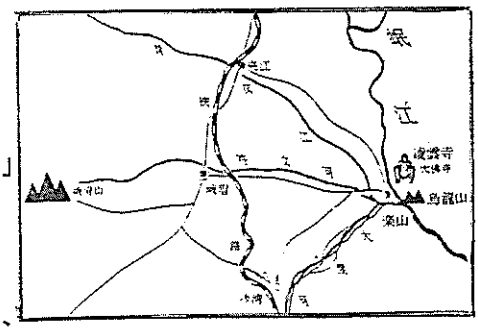
井研県でも同じような状態に遭遇し、渋滞と悪路に唖然として息を呑みながら楽山市に入った。するとバスは寒村の入口にあった中国人相手の田舎食堂の前で停車した。

この楽山市茅橋の「文君酒家」と看板を掲げた食堂は、漢の文人「司馬相如」の妻「卓文君」が、収入の少ない夫を助けるために開いた店であった。

漢の司馬相如（？～前１１８）は文人として武帝に仕え、西南の夷との交渉に功を立て、卓文君との熱烈な恋愛は有名である。彼はまた宮廷文学としての賦を確立し、「虚賦や大人賦が作品として知られている。

中国人には由緒ある食堂も我々の食欲をそそるような物は何もなく、汚ならしい食事を我慢して楽山大仏の見学に備えた。ただ別れに際して従業員全員が、飄々とした笑顔で手を振っていた光景が瞼に残っている。予期しない収入であったのであろう。

楽山の概要



楽山は長江の支流・岷江に流れ込む大渡河と青衣江とが合流する地にあり、唐代には嘉州と呼ばれた。それは美好の郷で吉祥の地という意味である。

古来から「天下山水之観在蜀、蜀之勝日嘉州」（天下の山水の景観は四川にあり、四川の最も秀でた景観は嘉州にある）と言われ、３０００年の歴史を誇る景勝地である。

また「上朝峨眉、下朝凌雲」と称されるほど、峨眉山と並んで楽山の山川は秀麗だと歌われている。（朝＝訪れる意でハイスと読む、凌雲は楽山大仏のある山の名称。上図参照）

さらに「峨眉天下秀、楽山天下奇」とまで賞賛される楽山は、岷江に面した凌雲山の断崖に刻んだ大仏が有名で、高さ７１ｍの摩崖仏は世界第一と言われている。

この大仏は唐の「嘉州凌雲寺大仏像記」によると、貴州の禅僧「海運」が唐の玄宗開元初年（７１３）に彫り始め、子から孫へと受け継がれて、９０年後の徳宗貞元１９年（８０３）に完成した。

岷江は唐時代には政治、経済、軍事的に最も重要な水道であった。唐朝は官吏を蜀に派遣して西南の物資を調達し、常に危険箇所を修理して水路の確保に努めた。

凌雲寺の僧「海運」は凌雲山に茅屋を結んで見ていると、河水の流れが山麓に集中し、万馬が奔騰するように流れが岩に激突していた。そのために何時も舟が転覆し、人命が失われることを知り、仏像を造ることを決心した。

岷江、大渡河、青衣江の合流地点の荒れ狂う水勢を鎮め、往き交う舟の安全運行を祈願するため、合流地に弥勒菩薩の大仏の造像を始めたのであった。

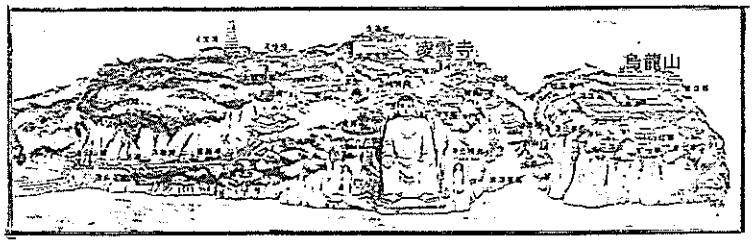
楽山大仏が建造された時代、即ち隋・唐の時代は印度の大乗仏教が興り始め、未来仏の弥勒仏を則天武后らが信仰していた。一般には仏像は結跏趺坐（あぐら）式だが、楽山大仏は垂足坐式で珍しく、漢民族化の特徴だと言われている。

楽山大仏は奈良の大仏の５倍の大きさで高さは７１ｍ、肩幅２８ｍ、脚の長さ２８ｍ、鼻は５、６ｍ、耳は７ｍ、眉の長さ５、６ｍ、目の長さ３、３ｍ、口唇は３、３ｍ、頸の長さ３ｍである。

大仏の上にある凌雲寺（別名は大仏寺）は唐代に創建された古刹で、宋代に建てられた高さ４０ｍ、１３層の霊宝塔が聳立している。

そして摩崖大仏を囲む山峰は烏龍山（南側）を頭に、凌雲山を胴体、亀城山（北側）を足とした巨大な寝釈迦の形をなし、大仏は胸の部分にあたると言われる。

楽山大仏の見学



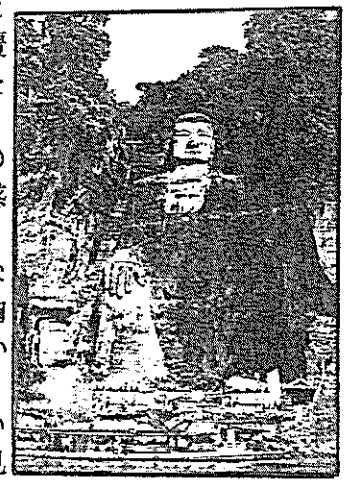
８時に恐竜の里・自貢を発ち、７時間後の午后３時に散々な目に合いながら楽山に着いた。

遥かに水郷の見える汚い細道を５００ｍばかり歩かされ、漸く岷江の河淵に出て、烏龍山埠頭から小さな遊覧船に乗船した。（上は大仏周辺の見取図）

今まで澄み渡っていた空は、流れる水が蒸発する影響であろうか、靄に包まれたように霞み、音もなく静かに流れる水上はこれまでと別次元の風景に変わり、恰も新しい頁をめくるような心地に誘うのであった。

出航すると間もなく、烏龍山の森の中に極彩色の烏龍寺が見え隠れし出した。峰が寄り添うように左に連なる凌雲山との間から、朱塗りの太鼓橋（索橋）が幽かに網膜に映り、胸の鼓動は次第に高まって目を皿にして凝視していた。

凡てが午睡しているような静けさの水面を、遊覧船はゆっくりと滑るように進んだ。物音一つ返ってこない風景の中に点々と白い影が浮かんでいる。それは凌雲山を下って河岸に降りる群衆で、屈曲した階段を凌雲桟道と呼んでいた。（上図の大仏の右側）



凌雲桟道の下に摩崖の守護神が彫られ、それを過ぎると速度を落とした船上の我々の目の前に、苔蒸した大仏が覆いかぶさるように現われた。波立つ心を押さえてカメラを構えたが、大仏が大きくてファインダーに入らない。

屹立した絶壁の崖面の巨像は魁偉無比、吉祥福善の徴のような容貌をして豊饒の地に臨み、一大楽土を築く心が感じられるのであった。（右は楽山大仏）

巨大な脚の付近に群がる遊客は大仏の足の親指ほどもない。よく見ると大仏の膝の上の５本の指は垂れ下がり、胸から腹部にかけて青草が生えている。又、顔は口をしっかりと結び、慈愛に満ちた厳粛な趣を漂わせていた。

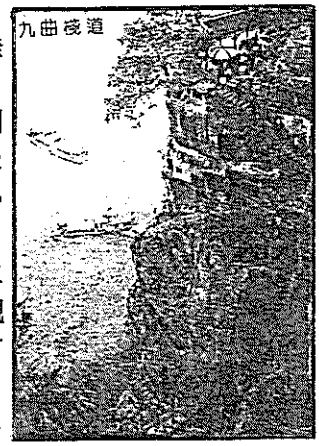
自然の山そのものが仏様というか、仏そのものが山というか、四川省は仏教芸術の宝庫という印象を強く受け、見渡す限りの全パノラマは、仏の里という感じが充満しているのであった。

大仏から遠ざかっていく船上に立ちながら、人と和す者はこれを「人楽」といい、天と和す者はこれを「天楽」というが、楽山大仏と和す者はこれを何というのかと思案していた。しかし名案は浮かばず、「仏楽」に落ち着いた。

遊覧船は反転して再び大仏に近づき、近くから眺め、或いは遠くから眺めるサービスを繰り返した。大仏さまの向かって左側に見えた垂直な階段を九曲桟道と呼び、地下から湧きでた蟻の行列のような人の波は、桟道を埋め尽くしていた。これは大仏の頭のところから足の指先のところに登り降りする人の姿で、今の体力の私にとっては

奇想天外な行動に思えた。

（右の写真は大仏の向かって左側の九曲桟道の景観で、垂直な断崖に梯子のように見えている）



老いも若きも強者も弱者も関係なく、死ぬことだけは予測できないが、桟道に見える彼等は人生をもっと「楽」しまなければならないと、喘ぎながら登攀しているように映っていた。

古代史の宝庫・四川省の中にある楽山大仏は、峨眉の錦に花を添えたようで、現在は自然を楽しむ楽土として大衆に親しまれていた。しかし奥地の関係か日本人には余り知られていない存在である。

遊覧船は岷江と大渡河とが合流する地に発達した、人口６００万の楽山市の埠頭に立ち寄り、金では買えない雄大で福々しい光景を楽しみながら、出航した凌雲山埠頭に引き返した。

乗車したバスは大仏を頭の上から眺めるため、烏龍山や凌雲山の山麓を遠く迂回し、３０分後に蘇東坡が書いた「凌雲禅院」の扁額の上がった凌雲寺の山門に到着した。

凌雲寺（大仏寺）は唐の開元初年に大仏が造られた時に拡張され、現在も天王殿、韋駄殿、大雄宝殿、蔵経殿の荘厳華麗な殿宇が建ち、唐・宋建築の風格を遺していた。

鬱蒼とした老樹が茂り、どことなく天の声が響いてくるような雰囲気が漂う境内を通り抜け、群衆を掻き分けて屹立した崖の端に立った。

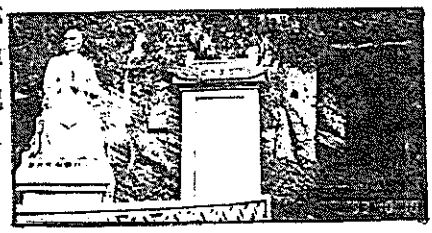
唐の玄宗、粛宗、代宗、徳宗の四皇帝の代を経て、今日まで１２００年の長い間風雨に晒らされた大仏の頭部が、重そうに私の眼に映ってきた。

（上の写真は凌雲山から見た大仏の頭部と、垂直な九曲桟道の景観）

しばし我を忘れて呆然と眺めて左下に視線を移すと、河淵まで垂直に伸びた九曲桟道は、水に浮かんだ梯子のような絵になる光景を呈していた。

群衆に引きずられるように急斜面の石段を下ったが体中が汗ばみ、直ぐ立ち止まって大仏を見上げ、ぐらつきながら大仏の足元を見降ろした。１００人が乗れるという足の上に立っている若者は、一生の想い出だと嬉々として写真を撮っていた。

垂直な石段を淋漓として流れる汗を拭きながら、杖を頼りにほうほうの体で登り始め、旅は仏様の贈り物だと感謝して上に辿り着いた。生涯の想い出である。



大仏の裏側の道を進むと静寂な大樹の蔭に石像が立っていた。「海運」の像である。像の右手に石碑と洞窟が見えた。この洞窟は海師洞と称され、伝説によると海運和尚は大仏を造像する間、この洞窟に住んでいたと伝えられている。

（右は海運の石像と石碑、洞窟の写真）

偉大な海運像の前に立つと、人間とは何かと自問自答させられるような感じを受けた。それに応えられる身ではないが、今日ここを訪れた心で、これからも生きて行きたいと眺めていた。

峨眉山麓へ

水と陸から楽山を目にした景観は、終わってみれば金で買えない貴重な財産となった。眼底に焼き付け心に刻み込んだ大仏を回顧し、古代中国人の発想の大きさに感嘆しながらバスに乗車した。

６時に楽山を去った一行は舗装された峨眉街道（約４０㎞）を、薄い霧靄の中を疾駆した。突然バスは停車した。今度は我々の車の故障（油系統）である。

修理に約１時間を費やして峨眉に向かうと漆黒の世界となり、電灯の光が殊のほか明るく感じた峨眉市街を眺め、樹林も夜の眠りに就いたような静けさの中を走り、寂寥とした森に建つ紅珠山賓館に到着した。時刻は８時である。

峨眉山麓の紅珠山の一角を占めるホテルは多くの棟に分かれ、幸いに我々は最高級の８号館が指定された。天候を気にしながら明日の峨眉山登山に備え、安眠が最善の療法だと澹漠として床に就いた。

峨眉山の概要

峨眉山は文殊菩薩の五台山（山西省）、観音菩薩の普陀山（浙江省）、地蔵菩薩の九華山（安徽省）と共に普賢菩薩の霊山として、中国四大仏教聖地の一つとなっている。

その起源については「峨眉志」によると、「蒲翁」という人が薬草を採るために入山した時、山頂を眺めると五色の雲が白光を放っているのが見えた。

すると忽ちのうちに一頭の鹿が現われ、その鹿に先導されて岩上に至ると、普賢大士（大士は菩薩の別名）の真相を見ることができた。そこで蒲翁はこの地を霊跡として仏に仕え、晋代（２６５～３１６）になって寺が建てられた。この寺を白水普賢寺（現在の万年寺）と名付けたという。

北宋の太祖の乾徳４年（９６６）、嘉州（楽山）からしばしば普賢菩薩の真相が現われることを上奏してきたので、内侍の張重進という人に勅命が下り、張重進は四川省にきて普賢菩薩の像に供養した。

次いで北宋の太宗の太平興国５年（９８０）、成都に勅命が下り、高さ２丈の金銅の普賢像を鋳造させ、大閣を建ててこの中に安置させた。また峨眉山に白水普賢寺、黒水華厳寺、中峰寺、乾昭寺、光相寺、の五寺を重修させた。

続いて雍熙４年（９８７）、太宗は内侍に命じて宝冠、瓔珞（ヨウラク、首飾り）、袈裟を下賜し、さらに端拱2年（９８９）、内侍の謝保意という人に命じ、黄金３百両を下賜して普賢の像を荘厳にさせた。

又、文帝は峨眉山の寺々の建物を修理させ、御製の文集を下賜した。真宗は大中祥

符4年（１０１１）詔を下し、黄金３千両を下賜して普賢寺を増築し、三万僧斎を設けた。

三万僧斎というのは３万人の僧侶の食事を供養する大法会のことを云う。峨眉山の全寺院の僧に供養した費用は莫大なものである。さらに毎年、僧４人を得度させて峨眉山の僧侶の充実をはかった。真宗の次の仁宗もまた峨眉山に供養品を下賜した。

このように北宋の太宗から仁宗までの、１０世紀後半から１１世紀にかけての５０年間が、峨眉山仏教の全盛期であったと云える。宋の皇帝たちが峨眉山の発展のために最も力を尽くした時代であった。

寺院も僧侶も繁栄の一途をたどった峨眉山もその後、３回にわたって火災に遭遇し、明の嘉靖年間（１５２２～６６）に更に重修したが再び炎上してしまった。峨眉山上は烈風が吹き荒れるため一度火が出ると、あっという間に全焼するのであった。

明の万暦年間（１５７３～１６１９）に、白水普賢寺は聖寿万年寺と改称されて現在に至っている。万年寺に就いては後記するが、現在の峨眉山の仏寺は殆ど明・清時代に重修されたものである。

［普賢とは、あまねく（普）一切の所に現われて賢者の功徳を示すことから、この名がある（華厳経）。即ち普賢とは仏の慈悲の極みの意味で、大乗仏教の菩薩の中でも仏の理性を示す菩薩とされている。

法華経では六牙の白象に乗って、法華経の信者を守護しにやってくると述べられ、文殊と共に釈迦の脇侍として、或いは単独でも信仰されている］

現在の峨眉山の寺院の数は７０余で、上記したように１６世紀には仏教の聖地と呼ばれるようになった。それ以前は道教の勢力が強く、後漢時代（２世紀）から道教の廟が建てられ、仏教の発展と共に道教は衰微した。

道教では寺院の大きさから、廟、閣、洞、祠の順に名称を異にしている。峨眉山の歴史や現地を見ると、今でも道教寺院の名称が遺っている。

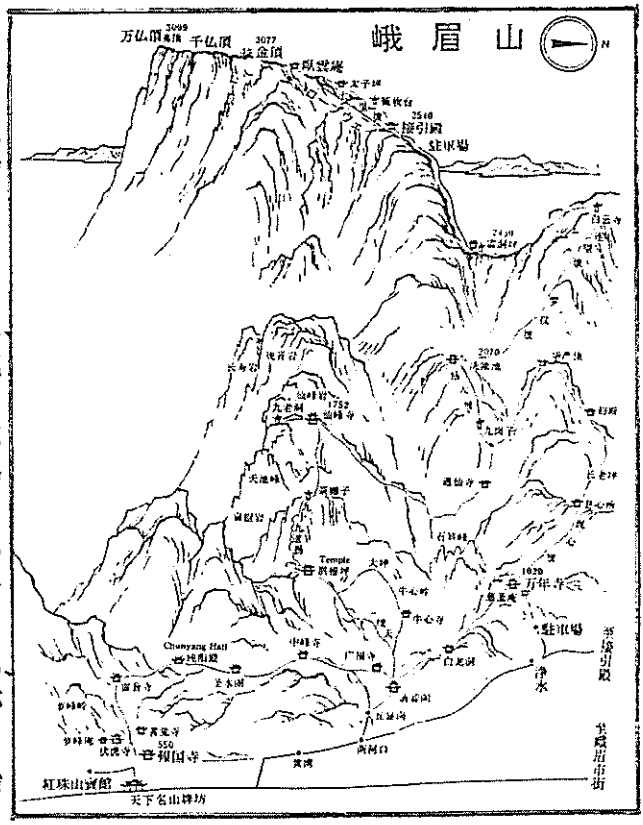
峨眉山は西から東に向かって大峨、中峨、小峨の３山が続き、「山は成都を去ること千里、秋日、清澄なれば両山を望見でき、相対峙すること峨眉（ガノマユ）の如し」と、左思・蜀都賦に書かれている。

即ち山峰が向かい合う様子が恰も美女の眉のようだから、峨眉と名付けられたのであった。（中国では３６０歩を１里としていた）

峨眉山の最高峰は万仏頂の３０９９ｍで、３０００ｍ級の峰々が連なっている。古来から「峨眉は天下に秀麗たり」とうたわれ、その山容の壮麗によって信仰の対象となっている。

又、山の自然は多岐にわたり、裾野（５００～１０００ｍ）は亜熱帯に属し、中腹（１０００～２０００ｍ）は温帯、頂上付近（２０００～３１００ｍ）は亜寒帯に属し、その温度差は約１５°Ｃである。

１０月１１日（月）霧雨　峨眉山観光



生きとし生きる者を導く広大な仏の聖地に一夜を明かした。

仏のお告げが現われる不思議な霊夢を期待したが、煩悩から離れられない我がを省みて、叶うはずはなかった。

久恋の峨眉の夜明けは溟々とした霧雨であった。仏の皮肉な贈り物の小雨を眺めて深い落胆を覚え、隔靴掻痒しながら一縷の望みを抱いていた。

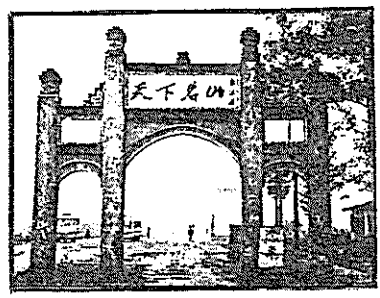
８時に紅珠山賓館を後にしたバスは、山麓全体が小雨に烟った鉛色の空の下を東に向かった。

私が今までに参拝した五台山や普陀山は、必ず清浄な世界に往けるような快晴であった。

しかし黄山や廬山は霧に包まれ、仏は何ものにも捕らわれない心が肝要だと、諭したのであろうか。

中国では古代から山は万物の始まりで生死をつかさどり、運命を支配する神霊として最大に尊敬された。それを思うと霧も神仏が作った芸術品のように見えてきた。

ホテルを発ったバスは直ぐ停車した。眼前に迫ってきたのは大牌坊（総門）である。牌の上には郭沫若氏の筆による「天下名山」の四文字が書かれていた。（右は古牌坊）



登山者は先ずこの古朴典雅な牌坊をくぐり、峨眉山の門戸となっている報国寺を参詣するのであった。しかし我々一行は逆のコースを辿っていた。

１９５８年秋に立った古牌坊と同型で、やや大きい新牌坊は１９９１年に建てられものであった。４本の柱の高さは１７、８ｍ、幅２２、２ｍの鉄筋コンクリート製で、新旧ともに仏教聖地らしい趣きを醸し出していた。

金　頂　へ（前頁の地図参照）

天下名山の牌坊（標高約５００ｍ）を過ぎたバスは、峨眉市街に通じる道路と別れて左に入った。いよいよ大自然が展開する秀、奇、険、幽の巍峨たる山勢に挑み、約２時間３０分を要する難路を踏破して金頂に向かうことになった。

万年寺の入口である浄水（前頁地図の右側）を通過した。渓谷の両岸は屏立して深山幽谷の気がこもり、各所に堂宇古刹が微かに見えて、名画の実物を見ているような感じであった。

一年のうちの３分の１は雲や霧に覆われている峨眉山は、どこまでも幻想的な小世界をつくり出し、案に相違して険路を走る車の数は少なくなかった。

霧が流れてちらっと雲間に青空が顔を出し、瑞象顕現の期待は大きく昂ってきた。しかし直ぐさま霧雨が広がり、万重の山峰は隠れてしまった。

糸のような霧雨が降り続いて、樹々は枝葉を垂れて濡れていた。その隙間から幽玄で壮麗な山谷に懸った滝が網膜に映り、峡谷を上る車窓の光景は悠久の宇宙を感じさせていた。

峨眉山は３０００種以上もある植物の宝庫といわれ、鬱蒼とした大樹の下に笹や竹も群生している。この中に峨眉山熊猫（パンダ）が見えないかと目を向け続けたが、雲霞暗然とした視界では見える筈がなかった。

左右の峰々が直聳する崖にはさまれた街道で、１両の車が峡谷の谷底に転落していた。神仙が棲むような険山険峡の霧烟の中では、一歩踏み外せば千仞の谷底が待ち受け、車窓から眺めるだけでも身震いがしていた。

海抜１０００ｍ以下では落葉樹や常緑樹や竹が多く茂り、１０００ｍを超すと常緑の闊葉樹や落葉の闊葉樹が多いようである。バスはやがて２０００ｍに達したのか針葉樹と闊葉樹が混ざりあい、次第に高山の針葉樹が多くなってきた。

断崖の岩肌に根を張った樹木が紅葉する美景が目に止まった。それを引立てるように落下する細い白滝を眺めていると、南画から抜け出したような幻想に取り付かれてしまった。

車は重畳とした険路を乗り越えて漸く接引殿（標高２４３０ｍ）下の駐車場に滑り込んだ。時刻は１０時３０分である。（前頁地図の上部）

客を待ち受けていた駕籠屋は一斉に押し掛けてきた。防寒用のオーバの貸衣裳屋から地図売りなども呼応してバスを取り囲み、お客の何十倍もの連中が商売をしているのであった。

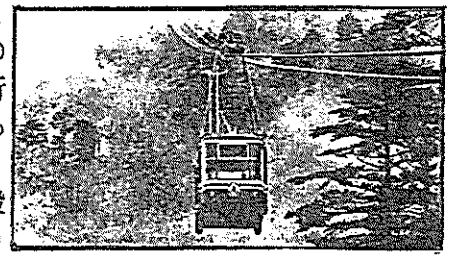
駐車場の周りには露天商が軒を連ね、飲食物のほか５０㎝もある「猿の腰掛」などを並べていたが、何時売れるのであろうか。中国らしい光景である。

一行の中で希望者だけが駕籠に乗ることになり、予定の通り私は真っ先に駕籠を雇った。重畳とした山に伸びる石段は空に懸けられた梯子のようで、喘ぎながら登る駕籠屋の掛け声は仙境に響き渡った。

駕籠屋は落葉を踏みしめながら、胸つき八丁の石段を一気に登ることはできない。途中、休憩するとまた物売りが集まってきた。それを数回繰り返して登った。駕籠屋が踏みつける足音を聞きながら秋の深まりを感じていると、漸く接引殿に辿り着いた。

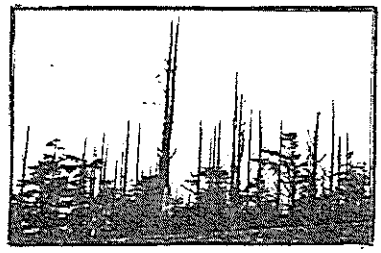
霧の動きが慌ただしくなってきた。時折、小雨がぱらつく中に接引殿の建物が姿を現わし、「南無大行普賢王菩薩」と書いた赤い垂れ幕が殿宇の前に見えていた。

「接引殿」は宋時代には接引庵と呼んでいたが明末に荒廃し、清の順治１７年、河北の老僧は接引殿の仏像が雪の中に埋もれていたのを発見し、寺院を建立した。しかし、これも民国年間に消失し、聖欽大師がまた重建したという歴史がある。



徒歩で登山する者にとっては接引殿は一息つく場所である。２４３０ｍの接引殿から金頂までの比高は約６５０ｍで、現在はケーブルカーが運行しており、昔はこの附近は寺廟の最も多い所であったという。（右はケーブルカー）

金頂に通じるケーブルカーは１９８８年に建設され、全長は１１６８ｍ、接引殿の駅は２５４０ｍ、金頂下の駅は３０４８ｍ、高度差は５０８ｍ、中国では最高海抜、最長のもので、老齢者や身体虚弱者が空気の稀薄な高山に登山するには大きな貢献である。膝の悪い私にとっては感謝しなければならないケーブルカーであった。



所要時間約５分で金頂の下の「臥雲庵」の駅に着いたところ、駅舎ではストーブを焚いていた。

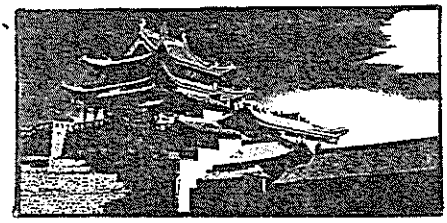
臥雲庵の周りは静寂幽邃、山気人に迫る光景で、低い灌木の中に青々とした針葉樹や枯れた針葉樹が、束の間の霧の晴れ間に展開した。

とくに天候の変化し易い高山の常緑樹の青さは目にしみた。このような世界にあるものでさえ、それぞれの本質ともいえる魂を持っている。まして人間は魂や本分を持たなければならないと、教えているように目に映っていた。（上の写真は臥雲庵附近の光景）

臥雲庵（２９頁地図の上部で３０５８ｍ）は、明の嘉靖年間に性天和尚が創建したものである。清代に重建されたが、その時、可聞和尚と大衆が石を運び、米を背負い、前後２０余年かかって完成したものであった。

標高３０００ｍ級の山々が荒波のように迫り、天空にそそり立つ臥雲庵の山門は、中央に「銀色世界」、両側に「法雨」「宗風」の扁額を掲げ、石段を登りつめた本殿の正面には、「臥雲庵」と「臥雲禅院」の扁額が金色に燦然と輝いていた。

臥雲庵の弥勒殿の前に据えられた香炉には、信者が献じた香煙が縷々として立ち昇り、神秘な原始の息吹きにふれるような感じであった。（上は臥雲庵の山門）



臥雲庵を過ぎると宇宙一切を包込んだ霧の中に、幽かに金頂正殿と金頂が空中の画のように浮き上がっていた。

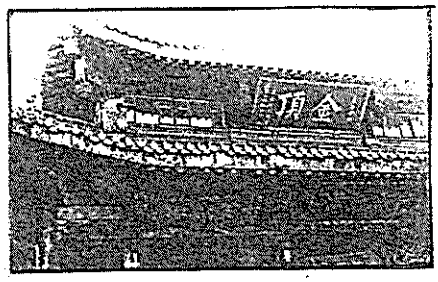
宇宙に存在する森羅万象の頂点に立ったように映る光景は、恰も金頂の光明が網雲を放っている感じであった。（右は見上げる金頂の光景）

指呼の間に見え隠れする金頂との比高は１９ｍ、そこに通じる参道の石段は天に続いているように見え、膝の痛みも忘れて無念夢想の境地で登った。

左手の湧き昇る霧の中に、忽然として半天にかかつた千仞の断崖が現われ、それに岩場の色付いた紅葉が加わって、一段と神秘な世界を具現していた。

数枚の落葉の舞い落ちる光景が目を刺激すると、「落葉はこれ情無きものにあらず、化して春泥と作（ナ）り、さらに花を護る」の詩が想い出された。

散る葉も心がない訳ではなく、春の泥土となって、やがて咲く花を守るのだ、という仏の輪廻の教えである。



胸は早鐘のように高鳴り、重い脚を引きずりながら気息奄々として金頂に達した。その悦びは疑う余地のない純粋なものであった。

これが幸福感というのであろうか。しばらく立ち止まって、天上に遊ぶ恍惚と充実感に夢中になって酔っていた。

（右の写真は金頂の上に建つ普賢金殿）

万水千山を越えて辿り着いた峨眉山の憧憬の地であった金頂、そこの普賢金殿には金色に輝く普賢菩薩が祀られ、感極まって己を忘れて拝礼した。

生きているからこそ、この醍醐味が味わえたのだ。これからの人生も一生懸命に生きるのだと恍惚のうちに祈願した。その記念として僧から絹布に法印を戴いて殿を辞し、展望台に進んで四周を眺めていた。（右は金殿の普賢菩薩像）

蒙々として天を覆った霧は、３０９９ｍの万仏頂や、これに次ぐ高峰の千仏頂、金頂の下に広がる捨身崖と呼ぶ６００ｍの大断崖など、全てを隠してしまっていた。

ほのかに期待していた仏光や雲海もまた見えず、無念残念と一人呆然と霧の中に立っていた。

人間を始めとして生の始めは暗く、死の終わりも冥いのだ。暗い中を人間は何処からきて何処に行くのか、と問うているように見える雲霧を睨み、立ち去り難い思いで登りと違った道を下った。

そこは「永明華厳寺」と名付けられる「金頂正殿」であった。珍しく剣を持ち鎧に身を固めた仏像や、便々として腹を突き出した布袋像が安置されていた。

金頂から降りた一行は、臥雲庵前の広場にあったレストランで昼食を摂った。ストーブを囲みながら３０００ｍの高山の味を噛み締め、再びケーブルカーに乗車して接引殿に戻った。

すると出迎えていた駕籠屋は私を見付け、再び駕籠に揺られながら揺れ動く雲霧の中を下り、無事に接引殿の駐車場に到着した。

私にとっては大きな磁石のような存在であった峨眉山頂をきわめ、何か一つ大事を成し遂げたような悦びを感じながらバスに乗車した。

車が錯綜する街道を走り、長期の風化作用によつて形成された峰の大波の間を下り続けた。戻り道は早く感じられるようで、浄水の村を右折して万年寺に向い、午后３時に万年寺駐車場に着いた。（２９頁地図参照）

万　年　寺（２９頁地図の右下）

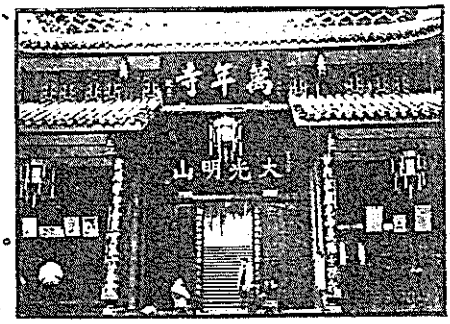
峻険な山峰と渓流の織り成す中に広がった駐車場でバスを降りた。周りの鬱蒼とした林の中に伸びた一本の石段を見ていると、例の如く我れ先にと客を奪い合う駕籠屋が殺到し、身動きもできない混乱状態となった。

漸く通訳の斡旋で駕籠屋が選ばれ、私の体はすべて駕籠屋に任すことになり、安心して万年寺の参道に向かった。

松や杉の常緑樹に混じった落葉樹から、一葉また一葉と霧雨に濡れた葉が石段の上に舞い落ちてきた。その中を威勢のいい駕籠屋はスピードを上げて登った。

巍峨の群峰は一峰も見えないものの、駕籠の上から見降ろす山の魅力は神話の世界に誘うようで、心地よく疲労した眼で眺めていた。（右は駕籠に乗ろうとする私と大野氏）

信者たちが人跡未踏の秘境に入り、命懸けで造った５００段の石段は、剣で削り取ったような岩肌をぬい、何か侵し難い厳粛な空気が漂っていた。



山麓から１５㎞も離れた危険な坂道を踏破して、体力の限界を覚えながら漸く駕籠は停った。そこから自力で数十段の石段を登りつめると、覆いかぶさるような万年寺の大山門が眼に映った。

大樹が天を衝き幽玄な閑静な境域に立った山門は、金文字の「萬年寺」と「大光明山」の扁額をかかげ、峨眉全山で最大寺院の威容を誇っていた。（右は萬年寺の山門）

万年寺は晋代に慧持大師によって創建されて普賢寺と称していた。唐の僖宗のときに慧通禅師が重建して白水寺と改名し、さらに宋代には白水普賢寺と呼ばれた。

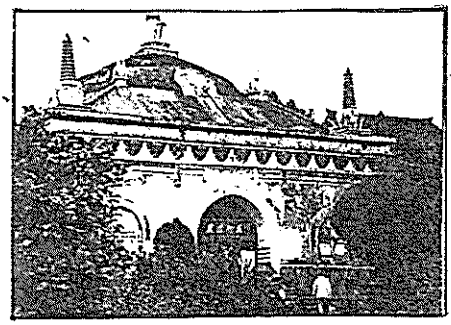
明の万暦帝は「無梁磚殿」に「聖寿萬年寺」の額を下賜し、これを略して萬年寺と改称して現在に至っている。（右は下賜された聖寿萬年寺の額）

１９４６年の大火によって三殿を残すほかは全部焼失してしまった。しかし現在では山門の後方に、弥勒殿、観音殿、鐘鼓楼、行願楼、般若堂、毘盧殿、無梁殿、巍峨宝殿の各殿宇が再建され、峨眉山の最重要寺院としての格式を保っている。

不思議なことに山門をくぐった頃から、万丈の山を覆っていた霧は流れて、明るさが蘇ってきた。山門内の広場では峨眉猿を手なずけた猿使いが、観光客を相手に一回１元で写真を撮らしていた。中国は急速に変化して次第に俗化の波が押し寄せ、何処彼処も商売気たっぷりである。

先ず最初に参観した弥勒殿には「白水秋風此是峨眉勝景」と書かれていた。そして例の如く殿内には金色の布袋像（中国では弥勒菩薩のこと）が安置されていた。

続く殿宇が最も有名な普賢菩薩を祀る「磚殿」であった。（磚とは粘土を固めて焼いたもの）



磚殿は明の万暦２８年（１６００）に建てられ、屋根は円形で四周の壁面は正方形の「天円地方」の建物である。（磚はセンと読む）

方形の高さは１７ｍ、長さは１６ｍで、インドやビルマの寺院の風格をなし、殿内は穹窿状となっている。（右は磚殿の外観）

磚殿は門に木材を使用している以外、梁や柱はなく、１本の木や釘を使用していないから「無梁殿」と呼ばれ、１９６１年に中国重要文化財に指定された。

威光のように屋根の上に立つ５本の塔を眺めながら門の前に立つと、明の万暦帝から下賜された「聖寿萬年寺」の古びた額が見え、その下に「萬行荘厳」の扁額があった。皇帝も１個の人間であり、万暦帝も信仰は人生の力だと信じたのであろう。

静かに殿内に足を踏み入れた。白光のように見える内壁の下部には２６個の小龕があり、龕の中には鉄製の羅漢が祀られていた。上部には無数の鉄製の小仏がはめこまれ、如何にも最高の仏殿らしい趣である。

穹窿状になった天井には彩色された４人の飛天の天女が、琵琶や笙や笛を手にして舞う姿が描かれ、恰も夢で胡蝶を見るような恍惚感を覚えるのであった。

殿内の中央には白象に乗った普賢菩薩の像が祀られ、生き生きとした荘厳な像は神秘的で、自然に己を忘れて一礼した。これこそ古来から多くの信者が参詣する峨眉山最高の仏像であった。（右は白象に乗った普賢菩薩像）

白象の４本の足は蓮座を踏み、２つの目は炯々として全身は重量感に溢れ、その象の背に普賢菩薩の蓮台が載っている。

菩薩の衣紋は美麗で花冠の彫刻は精緻、手に如意を持ち、その表情は厳粛であたりを威圧するようであった。

全体の高さは７、３５ｍ、白象の高さは３、３ｍ、普賢菩薩の高さは４、０５ｍ、その重さは６２トンといわれている。

正に巨大な像といわなければならず、巨大な白象と普賢菩薩が浮かんでいる姿は実に神々しく、峨眉山に訪れた満足感に包まれていた。

この普賢菩薩は宋の太平興国５年（９８０）に白水寺の僧・茂真大師が、皇帝から賜った黄金を基金にして、成都で各部分を鋳造して峨眉山に運び、それをつなぎ合わせて造ったものである。

巴蜀の国（四川省）の最高の像に接した私は陶然至福の境地となり、つづく「巍峨宝殿」に歩を進めると小さな池（白水池）が目に止まった。この池の中の蛙の鳴声が琴を弾く音のようだと言われ、実に幽邃な感じが漂っていた。

次の「大雄宝殿」には絶え間なく香煙が立ち昇り、殿内には釈迦、文殊、普賢の黄金色の三仏が祀られ、「観音殿」の上には「古白水寺」の扁額が上がっていた。

峨眉山の魅力に引き付けられて鵬程万里のこの地を訪れ、ここに名高い金頂と万年寺の参観が終了した。人生は夢のある時間で暮らしたいという感想に耽っていると、

限られた生命の尊さを知らされ、さらに人間の生の厳粛な意味がおぼろげに理解できるような感じになった。

下山の途について山門をくぐり、再び待たせておいた駕籠に乗った。途中の果てしなく続く水墨画のような風光は登山者の目を慰め、生きとし生けるものは凡て、自然の中で生かされているのだと見詰めていた。

駕籠は羊腸とした石段を転がるようなスピードで下り、疲れ果てて腑抜けのようになってバスに乗車した。絹のように滑らかな霧雨の中に沈んだ紅珠山賓館に着いたのは、漆黒となった夜７時であった。

今日一日、天然自然に翻弄された一日だったと回顧していた。山も林も粛然として夜の底に沈む中で、李白の「峨眉山月の歌」の「峨眉山月　半輪の秋　影は平羌（ヘイキョウ）の江水に入りて流る」を思い出していた。

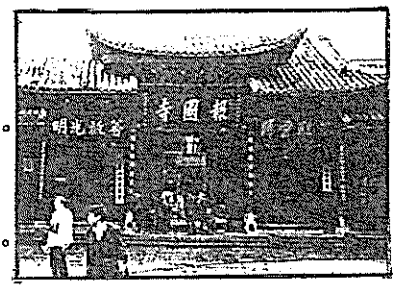
（峨眉の記事は四川科学技術出版社の「峨眉山旅遊指南」、及び成都科技大学出版社の「峨眉山旅遊拾粋」を一部参考）

１０月１２日（火）霧雨・曇　報　国　寺（２９頁地図左下）

鬱蒼とした林相に包まれたホテルの朝は、霧雨に濡れて静止したような美しさを呈していた。昨日は一日中、仏教聖地を歩いて人生の視界が広がり、人間に対する理解が深まったような感じを抱いて、床を離れた。

８時に出発したバスは峨眉山の門戸といわれる報国寺へと進んだ。今日は昨日の続きだといつた感じでいると、数分後に早や報国寺の山門が見えた。

報国寺の原名は「会宗堂」といい、明の万暦４３年（１６１５）に明光道人が創建したものである。



清の順治９年（１６７０）に今の地に移され、清の康熙帝から「報国寺」の額を賜り、報国寺と改名した。（右の写真は報国寺の山門と下賜された額）

その後、数次にわたって修築拡大され、現在の規模である弥勒殿、大雄殿、七仏殿、普賢殿が整えられた。伽藍は山に寄りかかって順次に高くなり、周りは翠竹や楠木などが生い茂って天を覆い、その下に池も点在している。

報国寺の特徴の一つは扁額が多いことであった。第１殿の山門には「報国寺」のほか「普照禅寺」「普放光明」「鶴駐雲帰」（上の写真参照）があり、門内には峨眉山全景図と紹介が、左右に大きく書かれていた。

第２殿の「弥勒殿」には「宝相荘厳」「慈雲西極」「法雨東垂」があり、どの寺院も同じように、笑って腹を突き出した布袋が安坐していた。

第３殿の「大雄宝殿」には「厳浄毘尼」「法演三乗」があり、金色燦然とした釈迦像が堂内を圧倒し、他の中国の寺院と同じく両側には１８羅漢が祀られていた。羅漢は中国人の脱俗の人間像の一つの理想と言われている。

昨夜「峨眉山と楽山」という市の文化局発行の雑誌を読んだところ、峨眉山は中国最大の尼僧の道場だと書かれていた。そのため「厳浄毘尼」の扁額があったようだ。

大雄宝殿の背後には明代に造られた紫銅の華厳塔が立っていた。塔は高さ６ｍの１４層からなり、表面に４７００余体の仏像と華厳経の全文が刻まれ、四川省の重要文化財となっていた。

第４殿の「七仏殿」には「七仏宝殿」の扁額が上がり、丈六の全身の七仏が坐っていた。それは釈迦よりも前世に成仏した毘婆尸仏（ヒバシ）、尸棄仏（シキ）、毘舎浮仏（ビシャフ）、拘留孫仏（クルソン）、拘那含牟尼仏（クナゴンムニ）、迦葉仏（カショウ）と、釈迦仏の七仏である。

禅宗では朝のお勤めの時にこの七仏の名前を唱えると言う。七仏殿の背面には明の永楽１３年（１４１５）に景徳鎮（江西省）で焼いた陶器の盧舎那仏があり、高さ２、４７ｍの仏像は蓮衣を着て蓮華台の上に坐っていた。

第５殿の「普賢殿」には荘厳な普賢菩薩が、香煙の立ち昇って光明に照らされた殿宇の中に祀られていた。しかしながら昨日と同様、殿内は撮影禁止のため記憶には限度があり、詳細に記述できないのは残念である。

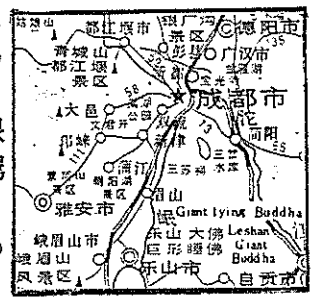
昨夜読んだ市の文化局発行の雑誌によると、１９３５年夏、蒋介石は報国寺にきて「峨眉山軍官訓練団」を作り、四川軍の将校を集めて特訓したと書かれていた。これは共産軍を攻撃するための訓練で、恐らく山岳戦の対ゲリラ戦だと考えられる。

又、この雑誌の中に、蒋介石は大雄宝殿の前で多くの僧と語り合い、或いは翠楼といわれる七仏殿の優雅な場所を散歩したと書かれていた。最後には六根清浄の聖地に、無人の境に入るように軍が入ったことは許せないと結んでいた。

約３０分の見学時間は既に経過し、憧れだった峨眉山の観光は凡て終わりを告げた。回顧すると重畳とした山あり断崖ありの峻厳な霊山は、雄大な霧に覆われて神秘的な霊気を醸し出していた。これこそ本当の現世を離脱した天資の姿だったように思えるのであった。

９時に報国寺と別れたバスは、山裾に海のように広がる霧雨をついて一路、成都街道を北に向かって疾駆した。

三　蘇　祠



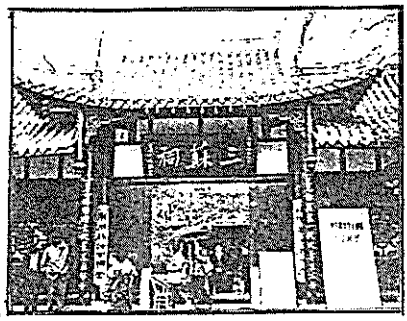
峨眉の仙境は山も川も中国人の心をとらえ、信仰の対象となった歴史は我々を魅了し、霧雨に濡れた織りなす景観とも別れて「眉山」（右図の中央部）へと疾走した。

報国寺の門前で仕入れた焼き芋を頬張りながら、中国に根づいた仏教の深さを改めて認識し、百歩雲梯の長い石段を駕籠で登ったことを、懐かしく思い出していた。

蜀の中央街道だけあって道路の舗装も完備し、車窓に映る大水田の拡がる光景は、流石に諸葛孔明が選んだ地である。産物が豊富で自然の要害を形成する天府の四川は、天然の倉庫で天子の倉の感じがしていた。

バスは峨眉～成都の２１０㎞の中間地点の眉山市に入った。眉山の古名は「眉州」と称して山川秀麗、物産豊富で蜀の文化の名城とまで言われた地である。

古跡の多い眉山は人材も多く輩出し、眉州木刻もまた中国三大刻版の中心地の一つで、南宋の詩人の「陸游」は「孕奇蓄秀当此地、郁然千載詩書城」と賞賛している



一行は眉山最高の名所である「三蘇祠」を参観した。「三蘇」とは「蘇洵」とその二子の「蘇軾」、「蘇轍」のことである。（右は三蘇祠の山門）

父子三人は北宋時代の文学家で、卓越した創造的な才能は古今に輝き、「唐宋八大家」に列している。

三蘇祠の山門をくぐって第二の門を見上げると、そこには黒地に朱で書いた「文献一家」の扁額が上がり、「一門父子三詞客」「千古文章四大家」の聯詩が燦然と輝いていた。

祠の殿宇には父の洵を中央にして右に軾、左に轍の像が祀られ、祠の庭園には古色蒼然とした古松や翠竹が生い茂り、石山が林立し、自然を友として暮らした書画筆墨が各所に飾られていた。

父の洵（号は老泉）は北宋の真宗の１００９年に眉山に生まれた。１７歳で進士（科挙）の試験に合格して１８歳で結婚。北宋の仁宗の末年（１０５６）に二子の軾、轍を携えて京（現在の河南省の開封）に上った。

北宋の政治家・文人の欧陽修は洵の文を見て感嘆し、洵の名声は大いに高まった。洵の文は雄偉で権数機変の言が多いのは、戦国時代の韓非子の影響があったと思われる。１０６６年に５７歳で卒した。

次子（長子は早卒している）の軾（号は東坡）は、北宋の仁宗の１０３７年に眉山に生まれた。幼時から聡明で７歳で書を読み、１０歳で文を能くし、２０歳のとき京に赴いて弟と共に進士の試験に合格した。

軾は北宋の仁宗、英宗、神宗、哲宗、徽宗の五帝に仕え、王安石の新法に反抗して斥けられることもあったが、各地の地方長官を歴任した。また文学のほかに詩人、画家、書法家としても有名である。１１０１年に６４歳で卒した。

軾の人となりは節義に富んで才気は横溢し、その文は行雲流水の如く、詩もまた世の中のことを気にしない飄逸で、李白の影響を受けているような感じがする。

三子の轍は北宋の仁宗の１０３９年に眉山に生まれて、１８歳で進士の試験に合格し、各地の地方長官を歴任した。轍は性格が豪傑で文もまたその人の如くであったようである。１１１２年に７３歳で卒した。

【「王安石の新法」　宋は建国以来の外征に敗れ、毎年多額の金額を「遼」「西夏」の両国に納めなければならなかった。それで富国強兵のために民間の商業に干渉し、或いは政府自ら商売を営み、その利をもって国庫を充実し、平時において人民に自費で兵馬の練習をさせ、一朝事ある時は之を用いるという策であった。所謂、政府の得る所は人民の失う所であるから、天下にその非を論ずる者が多くなった】

以上のように父子三人は政治的にも国家の積貧積弱を改善し、人民の願望に符合したから、世の人は「三蘇」と呼んだのである。

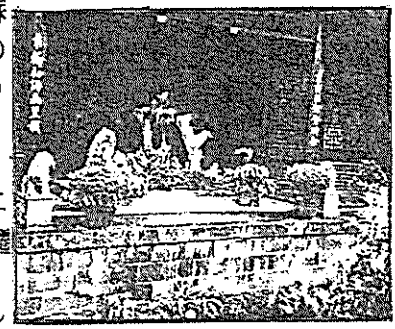
後世、唐・宋の文を論じる者は、韓、柳、欧、曽鞏、王安石に三蘇を加えて「唐宋

八大家文」と称し、天才的全能作家として尊敬されている。

北宋の都であった開封の地に戦時中、長らく駐屯したことのある私にとっては、三蘇についての憧れは人一倍大きいものがあり、興味をもって祠の中を廻った。

三蘇祠は元代に家を改造して祠としたことが始まりで、清の康熙４年（１６６５）に重建し、民国年間に一殿二楼十八亭の現在の規模になった。

祠殿の後方にある「木假山堂」は蘇家の故物で、蘇洵の作った木や山を模して作ったものであった。その前庭にある池の蓮の花は、人の心を理解できるという解語の花のように見えていた。



（右の写真は「木假山堂」の景観）

蘇軾の詩「春夜」の「春宵　一刻　直　千金、花に清香有り　月に陰有り、歌管　楼台　声　細々、鞦韆院落　夜　沈沈」を想い浮かべながら歩いた。

【春の宵の一時は千金の価値がある。花は清々しい香りにつつまれ、月はおぼろにかげって光もやわらかである。にぎやかな歌や管弦の音が響いていた高殿も、すっかり騒ぎも静まって、ぶらんこ（鞦韆）のある中庭（院落）に夜がふけいゆく】

ひなびた二層の物見台の前にあった、榕樹（ガジュマル）の花が咲く美景を背景にして、岩の上に坐った蘇軾の塑像が我々の目を引き付けた。

東坡帽という例の帽子をかぶり文士の服を着た像は、各地にある彼の遺址の像と同じで、万人が認める文豪らしさが自然に感じてくるのであった。

（右の写真は岩の上に坐った蘇軾の像）

つづいて古建築を彷彿させる碑亭に入った。蘇東坡（軾の号）の四大名碑と呼ばれるだけあって、２００余の木刻や石刻がならび、書法芸術、彫刻芸術に目を奪われてしまった。

急ぎ足で一巡したなかで一つだけ印象に残ったものは「洗硯池」であった。蘇軾が幼時に習った書法や絵画の練習のあと、硯を洗ったという池である。よく見ると今では池の中を小魚が泳ぎ回っていた。

三蘇祠は古語でいう「床しい」と云う言葉がぴったりであった。「床しい」と云うのは「行かしい」と云うことである。即ち「心がそちらに行きたい」、「魅力に引き寄せられる」ということではないだろうか。

そのような喜びを感じ、満腔に感動を受けながら三蘇祠を離れたのである。

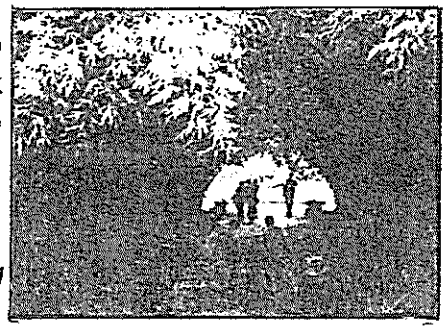
望江楼公園（４１頁地図参照）

奥深い静寂な中にあった三蘇祠を瞼に浮かべながら、小雨のぱらつく街道を金城湯池の蜀の牙城・成都へと進んだ。蘇軾が西湖に遊んで雨に逢った時の言葉「雨もまた奇なり」と、そっくりの空模様であった。

１８０万都市（郊外を含めて９５０万）の市内に入る前に、バスは行列をなしていた洗車場に滑り込んだ。成都の美観を保つため汚れた車は市内に入ることが禁止され、バスは洗浄しなければならない。よい習慣だと感心しながら眺めていた。

「錦城」とか「蓉城」（芙蓉・蓮の異名）とも呼ばれる成都の街は、市の木である銀杏の街路樹が延々と続き、バスは市の南端にある「望江楼公園」で停車した。

望江楼公園は錦江のほとりにあり、中唐の女流詩人「薛濤」（セツトウ、７６８～８３１）の住居だった望江楼を記念して、清代初期に創建した。彼女の字は「洪度」と称した。父を早く亡くして零落し、成都の歌妓をしていたが、詩文が巧みで白居易ら当代の詩人との交遊は有名である。



公園の入口には竹で作った珠を取り競う２匹の龍があり、一歩足を園内に踏み入れると、薛濤は自分を竹にたとえたというのに相応しく、珍しい観音竹のトンネルを潜らなければならなかった。その距離は５０ｍもあっただろうか。

（右の写真は竹のトンネル）

薛濤は竹を好み、自らの信条を「蒼々として勁（ツヨ）く節の奇なる」という竹の特性になぞらえたことから、１３０種類の竹が植えられ、別名を「竹の公園」と言われている。

園内には望江楼、濯錦楼、吟詩楼などの館があり、「琴糸竹」「人面竹」「八面竹」「大仏腹竹」などの珍しい竹に混じって、日本から寄贈された「大明竹」も見えていた。

枇杷門巷と書いた朱色の門を通過すると、竹やヒマラヤ杉に囲まれた池の中に奇岩の築山が見えてきた。池の水面は花を落とした芙蓉で覆われ、清閑幽寂な自然の美を作り出していた。

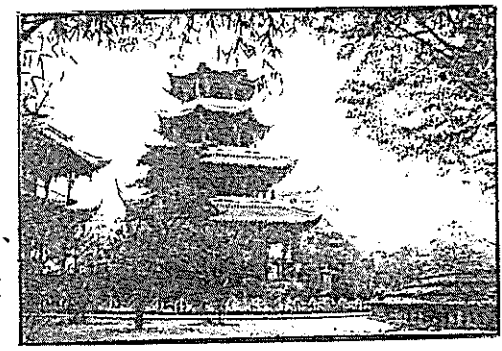
池の横にあった薛濤の立像は粛林とした中に立ち、崇麗閣の字の如く美麗で気品があり、幽趣を喚び起こさす姿に、立ち止まって惚れ惚れと見入っていた。

雨上がりの竹の緑の鮮やかさに、自分の身体まで蒼く染まってしまいそうな、竹林の中を逍遙として行くと、彼女が紙をすきながら詩を作ったという「薛濤井」があった。辺りから糸竹の音が聞こえてくるような、独特の神秘なものを醸し出していた。（上は薛濤の像）

錦江を渡ってくる微風が爽やかな香りを運び、竹の葉が揺れ動く旅情の中に、高く聳えた望江楼の楼閣が見えてきた。（次ぎの頁の写真が望江楼の美観）

清朝後期の１８８４年に建てられた望江楼は高さ３０ｍの四重の塔で、上が八角、下が四角になっており、園内で最も美しい眺めであった。

どこまでも続く蒼々とした竹林の幽玄の世界に女流詩人を偲び、神秘的な感じの竹冠と表現したい竹の天井を見上げ、ノスタルジックな心境になって園を去る時間を迎えた。



喧騒から逃れて一瞬の快を得た感じの望江楼公園を出た。辺りはすっかり暮色に包まれ、焦点がぼやけた視線に映るものは、殷賑を極める市内の人の波と灯の照明だけで、成都飯店に到着したのは夕刻の６時半であった。

中国旅行で気に入らないのは、ホテル以外のレストランで食事を摂ることであった。今夜もまた疲れに疲れながら、遠く離れた人民公園内のレストランの外食となり、ホテルに帰還して床に就いたのは深夜の１２時であった。

成都の概要

成都は四川省の中央に位置する省都で、長江の支流の岷江、沱江が形成する沖積平野（成都平野）の中央部を占め、古来から「天府の国」と呼ばれてきた。

「蜀山氏」と呼ばれた隴西、すなわち甘粛省の羌族（キョウゾク）の一派が九頂山をへて成都平原に入り、今から２３００年前の周末に蜀の都として栄え、成都と名付けた。以後この名は変えられていない。これは中国では唯一の事例である。

秦は蜀を破ったあと成都県を置いた。秦と列国との連衡（合縦連衡の）を説いた張儀は新城を建設し、城内に蜀郡の大守府を設けた。

その後、蜀郡の大守・張若は更に小城を三つ増築し成都の範囲を拡大した。張儀城は大城、張若城は小城または子城と呼ばれた。「都江堰」を開いた李冰（リヒョウ）は張若のあとの蜀の大守を継いでいる。

漢代には東方から多くの漢族が入ってきて平地を開拓し、成都の人口も増加した。元帝の時代には長安についで、全国四大都市の一つに数えられるようになった。

又、漢代には宮廷への貢物として「蜀中の宝」と呼ばれる生糸でつくった蜀錦、すなわち錦織の産地として発達し、専門の官吏に管理され、「錦城」が成都の代名詞ともなった。

後漢（２５～２２０）には益州（今の四川省に置かれた漢代の州のことで、唐代以降は成都府と改められた）の蜀郡の郡治がおかれた。

三国時代には「赤壁の戦」で魏の曹操に勝利した劉備玄徳は、２２１年、知将諸葛孔明の戦略の通り成都に入り、蜀（蜀漢）の国を建設し帝を名乗った。そして魏の曹操、呉の孫権と覇を争って天下を三分した。

唐代には蜀錦製造はさらに発達し、揚州（江蘇省）とともに中国第２の都として繁栄した。五代十国時代の後蜀（９３３～９６５）の王孟昶（チョウ）が城内に芙蓉を植えたことから、成都は「蓉城」と呼ばれた。現在も略称は「蓉」である。

元代になって初めて四川省がおかれ、首都は重慶とされたが、明・清になって成都

は省都として再び四川省の政治の中心となった。

中華民国後、１９３０年に市に昇格し、現在では前３世紀に李冰父子によって開かれた北西の灌県の都江堰をはじめ、広範な灌漑施設網によって水利の便もよく、稲、綿の栽培などの農業が発達している。（四川省は米、菜種、桐油の生産は全国一）

蜀錦や緞子（ドンス）、清代の官営製革廠以来の工場による皮革製品や、家具などの伝統的な手工業が盛んな一方、現在は近代的工業の発展が目覚ましい。

２０００年以上の歴史を通じて成都は物産豊富な地方として発達したが、「蜀道の難きは青天に上るより難し」と李白が詠んだように、古来、地理的条件から交通の便は極めて悪かった。しかしこれは逆に「天然の要害」となったため、春秋以来、何人もの英雄たちがここを都とした。

解放以前は１本の鉄道もなかったが、現在では交通の要衝として発達し、政治、経済、文化の一大中心地となっている。

私が特に注目するのは、中国の軍用機を始めとする軍需産業が、成都・重慶を中心の奥地に集中していることだ。中国の武器輸出は米国など西側諸国から強い批判を浴び、冷戦構造の崩壊から民需への転換が多難であることである。

国防優先のあまり経済の合理性を無視した政策が、ここにきて中国経済の発展を阻害している。山間僻地の軍需工場を都市郊外に移転することは容易ではない。

四川省では日本の技術を導入して大砲工場をオートバイ工場に、レーダー工場をカラーテレビ工場の変身に成功した例もあるようだが、国防科技工業委員会機関紙によると、昨年の軍需工場の過半数が大赤字だったと報道していた。軍需産業優先のツケが重く伸し掛かっているようだ。

１０月１３日（水）小雨のち曇

６時に起床すると今日も雨模様で道路は濡れていた。温暖な気候と肥沃な土地、それに多量の雨に恵まれ、それが天府と呼ばれる豊かな国をつくり、兵家必争の戦略的な要衝となったのだ、と古都の風情を遺す街の歴史を回顧していた。

戦国時代の秦が全国を統一できたのは、豊かな天府の国を背後に控えていたからである。漢の高祖の劉邦もこの地によって天下を取って帝業を成し遂げ、三国志の蜀の劉備が建国できたのも亦然りであった。

魏・呉・蜀の三国志を思い出していると「魏志倭人伝」が、頭の中に浮かんできた。日本国の始まりの章に出てくるのは「卑弥呼」であり、「邪馬台国」である。（上は成都市内の地図）

【魏志倭人伝は、魏書東夷伝にある倭人に関する記事で、邪馬台国とその女王の卑弥呼について書かれており、３世紀の日本の政情、風俗などを書いている】

これには、日本をさげむ「卑」（いやしい）とか、「邪」（よこしま）とかの言葉を使っている。現在でも、属国扱いにした中国の歴史の悪い血筋だけが、受け継がれているような気がしてならない。これが中華思想である。

ロビーに８時に集合した。昨夜一行の中の誰かが成都動物園のパンダが見たいと申し出て、動物園の見学が決まったと告げられた。

早速、私は反対した。極く一部の人の意見を採り入れて、全体を考慮しない添乗員の愚を追及した。何故に成都まできてパンダだ。歴史的な遺跡の多い成都の街には見るべきところは沢山あるはずである。

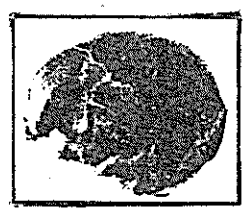
動物園に行きたい人は個人で行けばよく、平気で全体を犠牲にするのは日本人の欠点である。何回かの海外旅行でもこのようなことを経験したが、全員に諮るべきだと強く意見を述べた。

添乗員は降雨のため、パンダは檻から出ないという理由で動物園行を中止し、街道を走る色とりどりの合羽をかぶった自転車の洪水を眺めながら、「竹細工工場」に誘導された。

ここは竹を細かく裂いたものを陶器に巻く手工芸場で、我々も見覚えがあり、日本にも輸出していると言われ、中国人の手先の起用さが窺われた。（右は陶器に竹を巻く手作業）

続いて「四川省博物館」の見学となった。波状形の屋根の堂々とした博物館は、１９４１年に創建された大規模のもので、蔵品は１６万点に及んでいた。

豊富な森林資源と肥沃な大地に恵まれた天府の国では、１７０万年前の猿人の化石も発見され、ここは中国の中でも最も早い時期に原始時代が始まった地方である。



当時から四川省には少数民族が暮らしており、殷（前１６世紀～前１１世紀）、周（前１１世紀～前７７１年）の文物も展示され、蜀人の生活から巴蜀文化が窺えたのであった。

短時間で詳細に見学することは容易ではなかったが、特に注目したのは２～３万年前の旧石器時代の「人頭化石」で、大陸のスケールの大きさに痛感させられてしまった。（右は人頭化石）

戦国時代（前４７５～前２２１）ものでは銅製の鉾や剣に矢尻が多く、秦漢時代になると鉄が発達して鉄刀その他の鉄器類が多く展示され、それ以降のものは各地の博物館でも見られるものばかりであった。

約１時間の見学時間は瞬く間に経過し、未練を残しながら博物館を去り、唐代の詩聖と尊ばれた杜甫の草堂へと向かった。

杜甫草堂（４１頁地図参照）

杜甫草堂は成都西郊の浣花渓のほとりにある杜甫の住居跡で、旧名を梵安寺と称した。（右は草堂内の花径の門）

杜甫は７１２年に則天武后朝の詩人・杜審言の孫として洛陽南郊の鞏県で生まれ、若いころは呉越などの広い地域を遊歴した。

２４歳のとき洛陽で科挙の試験をうけたが失敗、以後もしばしば落第したが、天宝１４年（７５５）、玄宗皇帝に詩才を認められて長安の都で仕え、特別な抜擢をうけて「太子右衛率参軍」として官位に就いた。

４８歳のときの安禄山の乱には一時、長安に捕らわれる身となったが、逃亡して粛宗の陣営に赴き、「左拾遺」を授けられた。しかし粛宗との意見の相違が原因となって、華州（陝西省）の「司功参軍」に移された。

その後、官位を捨て７５９年冬、妻子を連れ秦州（甘粛省の天水）を経由して成都に行き、友人の厳武の推薦で「節度参謀、検校工部員外郎」の職を与えられ、高適らの旧友と酒を酌みかわし、詩を唱和する幸福な生活を送った。

杜甫が７５９年から３年間暮らしたところが杜甫草堂である。浣花渓のほとりの樹齢２００年以上の柏の木の下に、仮小屋の草堂をつくって質素な生活を送った。この時が彼の人生の中で唯一の、そして最も平和で安定した時期であった。

彼の全作品１４００首のうち、ここの３年間に詠んだ詩は実に２４７篇にのぼっている。彼の安いだ心境が「春夜喜雨」、「江村」といった詩からうかがい知ることができる。

杜甫はここで薬草園を開き、詩人として最も充実した時期であったが、この暮らしも長くは続かなかった。その後、友人の厳武が死ぬと職を失い、再び妻子を連れて揚子江（長江）を下り、最後は洞庭湖を漂流する船中で没した。享年４９歳である。

唐の末、杜甫を記念するために仮小屋の跡に草庵が建てられ、五代、宋代にも重修された。そして明の弘治１３年（１５００）と、清の嘉慶１６年（１８１１）に大規模に拡張したのが、今の杜甫草堂である。

現在全国の多くの地に詩賢・杜甫を祀っているが、それらの遺跡の中で最大なものが成都の草堂で、いかに大衆から愛されてきたかが窺われる。

（以上は成都出版社発行「杜甫草堂」を一部参考）

一行を乗せて杜甫草堂へと向かった車の中で、有名な「春望」の詩が思い出され、昭和２０年８月１５日、我々が敗戦したときの心境が蘇ってきた。

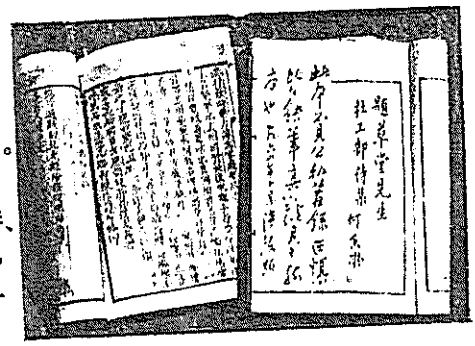
【国破れて山河在り、城春にして草木深し、時に感じては花にも涙をそそぎ、別れを恨んでは鳥にも心を驚かす、烽火三月に連なり、家書万金にあたる、白頭掻けば更に短く、すべて簪（シン）に勝（タ）えざらんと欲す】

天宝１４年（７５５）１１月、反乱を起した安禄山の軍は怒濤の勢いで官軍を打ち破り、翌年の６月には都の長安を陥落させた。上記した詩は、長安を脱出できなった杜甫が７５７年春に詠んだもので、概略の詩の意を下記しておく。

【都の長安は破壊されたが、見渡す山や河はもとの姿をとどめ、荒廃した町にも春がやってきて、草や木が青々と茂っている。
戦いつづきの悲しみが深く心にしみこんでいる私は、美しい春の花を見てさえ涙がこぼれ落ち、家族との離別をうらめしく思うあまり、小鳥のさえずりを耳にしてさえ、心をおののかせる。
敵襲を知らせる狼煙（ノロシ）の火が、もう３ケ月も夜空をこがし続け、待ちわびる家族からの手紙は、万金のような貴重なものに思われる。
もともと白いものが混じっていた髪は、掻き上げてみると薄くなっており、冠をとめる簪（カンザシ）も、すっかり支えきれなくなった。】

杜甫草堂の正門には杜甫が居所としたト居らしく、草書で書いた青い門標がかかり、故居の中は竹林を配した清幽な自然の庭園となっていた。
渓流の荷蓮池にかかった石橋を渡ると、名も知らない黄と紅の花をつけた老樹や翠竹が天を覆い、典雅な景観は人の心を浄化するような雰囲気であった。（上は杜甫草堂の正門と門標）

大樹の生い茂った中に三重の庁堂があり、そこを過ぎると「詩史堂」が建っていた。苔蒸した堂の中には詩聖と称せられた唐代の大詩人、杜甫の塑像が祀られ、特徴のある髭（クチヒゲ）と鬚（アゴヒゲ）、それに深沈とした眼光には、国家を思う赤心が表れていた。
（右の写真は詩史堂に祀られた杜甫像）
像の両側には、中共軍の総帥であった朱徳が草堂を訪れて詠んだ、「草堂留后世」「詩聖著千秋」の聯詩一副が掲げられていた。
なぜ「詩史」と名付けられたのであろうか。それは、安禄山の賊軍が長安の都を占領した時に詠んだ、「国破れて山河在り」の詩に表れているように、杜甫の国を憂い民族を思う「義」の心が思想的な歴史として、「詩史」の二字となったように考えられる。

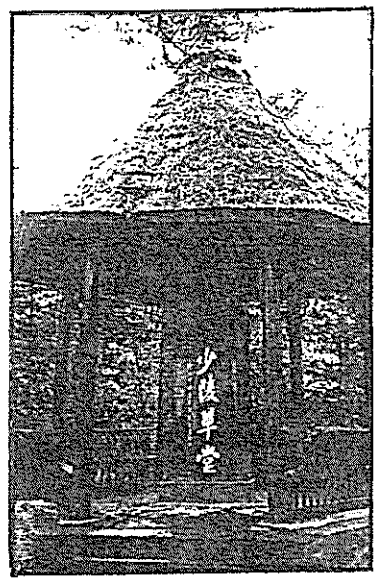


詩史堂の左右の両棟は陳列室となっており、所謂、草堂書屋であった。ここには各時代に発行された古今の杜甫の詩集や、世界各国で翻訳された書物など、約１２０種が展示されていた。
（右は展示品の一つ）
詩中に画があり、画の中に詩があるなど、詩、書、画の芸術品は数千点に及び、陳列されているものは極く一部に過ぎない。無学の私には一つとして理解できるものはなかった。
詩史堂の裏手の池水を渡り、満目青翠の紫門をくぐると「工部祠」であった。その中の中央に杜甫の全身像が安置されていた。又、宋時代の詩人で杜甫を作詩の手本とした「黄庭堅」と「陸游」の塑像も祀られていた。

前記したように都から逃避して成都に辿り着いた杜甫は、友人の厳武の推薦で検校工部員外郎の職に就いた。その後、彼の職名を記念するために「工部祠」と称し、清の嘉慶１６年に創建された。

王侯貴族でもない杜甫が、これほどまでに尊敬されるのは詩人ばかりではなく、道徳的な文章が後世まで深く影響したからである。

工部祠の東側にある翠竹や楠の林の中に、茅で葺いた碑亭が立ち、石碑には「少陵草堂」と白く刻まれていた。（右の写真は茅葺の碑亭と「少陵草堂」の石碑）

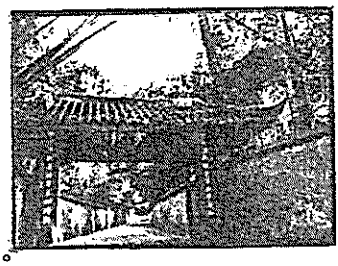


この古竹や古楠の森々とした下で、杜甫が詩を詠み、詩を吟じた姿が彷彿として浮かんでくる。

なぜ「少陵草堂」と題したのであろうか。かって杜甫が長安の杜陵という所に居をかまえて「杜陵布衣」と自称していた。一方、杜陵の東南方１０余里のところに少陵という所もあった。

ところが杜陵の本名は杜原で、漢の宣帝の筑陵が杜陵と改名されたから、杜甫は杜陵布衣から「少陵野老」に改めた。それから後世の人々は「杜少陵」と呼ぶようになり、杜甫草堂を「少陵草堂」と題したと言い伝えられている。

少陵草堂の碑亭から蓊蒼とした満眼青緑の大樹の傘の下を進み、「花径」の扁額が上がった門をくぐって、正門への帰路に就いた。（右は花径と門）



静かに歩を運んでいると右側に盆景園と浣花祠が見えてきた。花径に隣接して草堂寺があり、花径は寺の参道のように朱色の塀垣で囲まれ、知らず識らずのうちに杜甫の詠んだ「春夜喜雨」（春夜　雨を喜ぶ）の詩が脳中を走った。

【好雨　時節を知り、春に当たりて乃ち発生す、風に随ひて潜かに夜に入り、物を潤して細やかにして声無し、野径　雲　倶に黒く、江船　火　独り明らかなり、暁に紅の湿（ウルホ）える処を看（ミ）ば、花は錦官城に重からん】

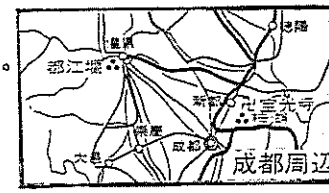
この詩はこの草堂で詠んだものである。錦官城とは錦城（成都城）のことで、大意は次のようになる。

【ほどよい潤いの雨は降るべき時節を心得ており、雨の必要なこの春に降り出した。
風に乗ってひっそりと真夜中に降り、万物に潤いを与えて細やかに音もない。
野の小道は雲に包まれて黒々と沈み、江に浮かぶ船の灯だけがぽつんと明るい。
明朝、紅色に湿っている所を見るなら、それは花が錦官城でしっとりと重たげに咲いている姿であろう】

「居は気を移す」という通り、人の住む場所は人の気分に影響する。杜甫はよほどこの草堂を好み、立派な詩を詠んだのであろうと思いながら草堂を去った。

確かに詩は純粋な感情の発露であり、私の好きな旅も一つの芸術だ。だから詩や絵画のように旅を綴らなければならない。しかし、才能のない皮相浅博な私は人を羨むよりは、いかに自分の資質を伸ばすかが、賢明な生き方だと自覚していた。

都　江　堰（右下地図参照）



午后の観光は成都西方５５㎞の灌県にある都江堰の見学となり、昼食を摂った市内のレストランを１時に出発した。

市街を離れるにつれて詩情豊かな田園風景が展開し、珍しく薄曇りの空に藁屋根の農家が見え、竹藪までが点在する風景は、古い日本の農村を思わせてくれた。

先ず「都江堰の概要」を記述する。

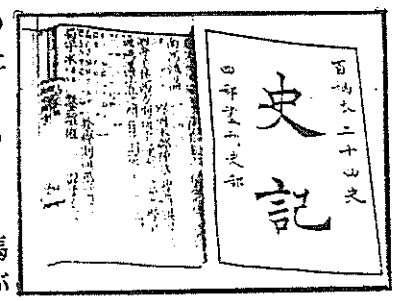
都江堰は２２００年以上の歴史がある中国古代の有名な水利施設で、この灌漑用水が成都平野にもたらした利益は計り知れず、天府の国と云われる四川の豊富な農作物を支える基礎となっている。

戦国時代の秦の昭襄王の後期（前約２５０年）、蜀郡の郡守となった「李冰」（リヒョウ）は、岷江（都江は古名）の氾濫を防ぐと共に農業の発展のために堰堤を築き、息子の「李二郎」が継承して造った堰である。

国家国民のために尽くし傑出した水利家「李冰」は、第２の禹王（水利の神）とまで尊敬されている。その意思の強固と勇敢、それに知恵の結晶は、中国古代文明の偉大さを物語っている。

どのようにして２２００年以上も前に岩を砕き、川を堰き止めて流れを分けたのであろうか。（右は堰によって２分された流れと吊橋）

先ず岸壁を火で焼き、それに水をかけて岩面を冷し、それから生じる割れ目を利用して細かく岩山を砕いた。その採石を竹で編んだカゴで運び、川に沈めたと云われている。実に素晴らしい人間の知恵である。



極めて緻密な科学的な計画は、現代の宇宙科学にも匹敵するもので、万里の長城や隋代の大運河建設以上のものだったと、感嘆しなければならない。

重畳とした両岸の岸壁を砕いて奔騰する河中に造った堰堤を、四川省の人たちは「天府銀河」と誉称し、李冰を「神功」と尊敬した。

漢の武帝の元鼎６年（前１１１）秋、歴史家の司馬遷がこの都江堰を訪れ、李冰の功績をたたえたことが「史記」に書いてある。（右は左上の史記の文に李冰のことが書いてある）

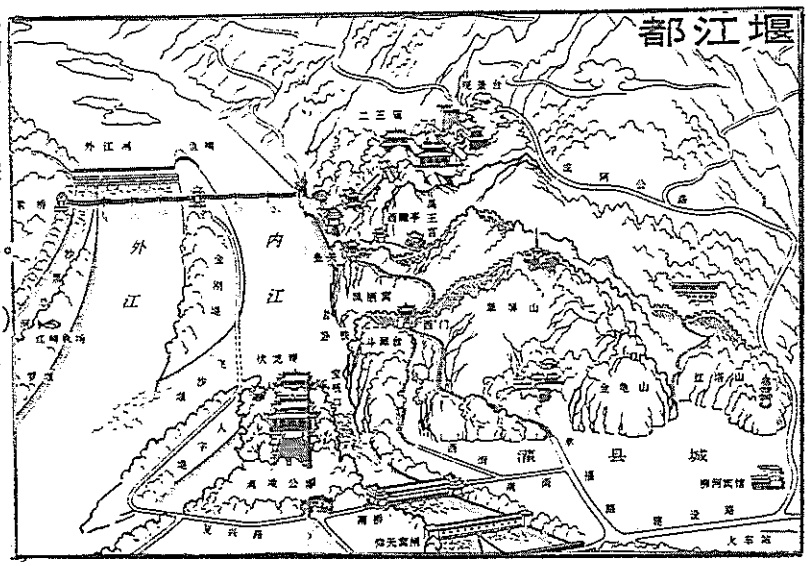
又、諸葛孔明も兵１２００名を派遣して堰堤を修理し、富国強兵に努めた記事も見られる。

都江堰の名称は諸葛孔明が修理をした際、国を挙げて都を安らかにしたという意味で「都安堰」と称し、宋代になって「都江堰」に改称された。それは前記したように、岷江の別名が都江であったからである。

【観　光】（右下の地図参照）

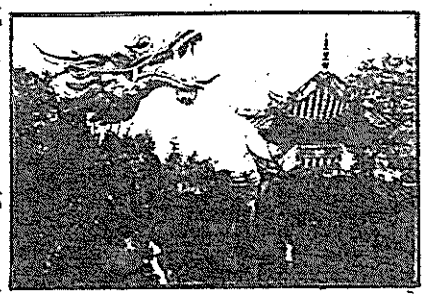
〔伏龍観〕

都江堰に向かったバスは灌県城の東側に入り、内江（右図参照）の下流にある橋を渡り、内江の突端にある「伏龍観」の見学から始まった。（観は道教寺院では大寺院のことを云う）



伏龍観は三方が水に囲まれた離堆公園の北端にあり、満香の菊の花で埋まった寺院は、古典的な建築と宗教性、記念性の三重の意味をもっていた。

名称の由来は、岷江の龍を封じ込めたという伝説によるものである。伏龍観の前殿の中には高さ２ｍの李冰の石像が祀られ、李冰父子は四川省の人々の信仰の対象となっていた。（右は伏龍観の一部）



石像の上には「功昭蜀道」の扁額が上がり、右に「澤被四川」、左に「中流砥柱」と書いた聯が下がっていた。

この石像は深さ４、５ｍの河床に１８００年以上も埋まっていたもので、１９７４年３月３日に発見されて伏龍観に移されたのである。

殿宇の回廊を周って北端に立つと、遠く北の方に２分された内江と外江が、浮き上がった白い帯のように見えていた。

内江の流れは伏龍観でまた２分され、万馬の奔騰するような流れの中に、用水の取入口の「宝瓶口」が見えた。

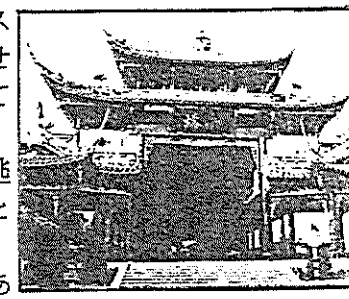
（右は取入口の宝瓶口、位置は上の地図参照）

岷江の左右にある断崖は壁立し、急流となって逆巻く流水を取り入れる光景は、瓶の口が泡をふいて水を飲むように狂濤しているから、「宝瓶口」と呼ばれたと言われている。

夜々、蛟竜が鳴き叫ぶような錯覚を覚える宝瓶口と、建築の壮観な美観が調和している景観に、しばし陶然としながら伏龍観伝説の説明に耳を傾けていた。

宝瓶口の引水口の高さ１３ｍ、幅４３ｍ、山の下穿って流れる長さ８０ｍもあり、これが完成して以来、成都平野は飢饉を知らず、天府の国の原動力となったのである。

内江の流水が快い響きを立てていた伏龍観を去り、バスの待つ門前市をなしている街角に出ると、瑠璃瓦をのせた朱塗りで極彩色の「南橋」が、我々の目を引き付けていた。（位置は前頁地図参照）



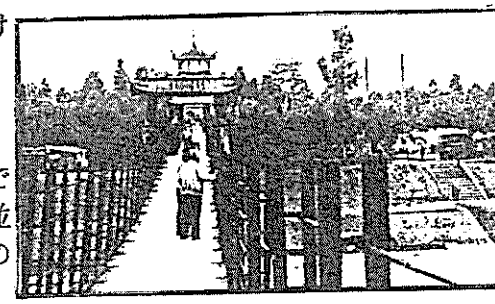
伝説によると李冰が伏龍観のところで捕らえた龍が逃げ、この龍を再び南橋の場所で捕らえて鎖につないだと言われている。だから「鎖龍橋」とも呼ばれている。

水上の楼閣のように見える南橋は橋の両側に店舗があり、橋頭の楼閣は鐘楼のようにも思われる珍しい橋であった。（上は南橋）

眼の保養をさせてくれた離堆公園を離れた一行は、岷江の東側に聳える連峰を大きく迂回し、都江堰観光の最高の圧巻である古堰と鉄索橋へと向かった。

〔古堰と鉄索橋〕（前頁地図参照）

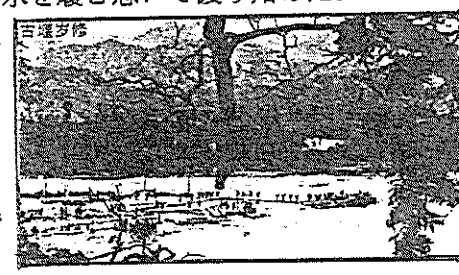
重畳とした峰を縫うようにして北進を続けると、青羅の帯のような岷江が眼前に現れ、流れを右に見ながら下流に向かって走った。（前頁地図の中央上のやや左から南下）



断崖の下に通じる道路が行きつまった処でバスは停車した。そこには露天商人の店が並んで行楽の人達で埋まり、殷賑を極めて祭のような人出であった。

河岸には都江堰に渡る鉄索橋（吊橋）の進入口があり、石で造った「安瀾橋」（瀾は大波の意）と書いた楼閣が立っていた。中国人を始め都江堰に渡る大衆は、吊橋に吸い込まれるように入って行った。（上の写真は吊橋と途中の楼閣）

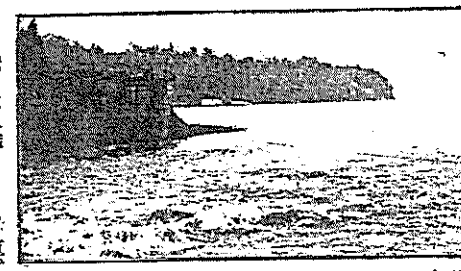
内江と外江の上をまたぐ吊橋は全長３２０ｍ、幅１、５ｍで、都江堰の名所の一つとなっており、私も左右に大きく揺れる橋を薄氷を履む思いで渡り始めた。



吊橋の歩み板の隙間から見える流れは透き通るように清く、川底に映った石は手に取るように見えていた。

眼が慣れてくるに従って視線を上流に向けながら歩いた。そこに見えてきたのが李冰の造った堰堤であったが、開放後、大修理して写真で見る昔の面影は残っていない。

（右上は昔の堰堤の写真、右下は現在の堰堤）



手摺りにつかまり双脚を震わせながら恐る恐る渡ると、自転車を引いて渡る中国人は笑いながら追い越し、涼々と流れる水の音も私には轟音のように聞こえていた。

内江と外江との中間にある中州になっている「金剛堤」（地図参照）で吊橋を降り、都江堰と書いた石碑を眺めて北端まで歩いた。ここが「魚嘴」（ギョシ）と呼ばれる分水堤

であった。（前頁一番下の写真の手前の方の突端）

外江（本流）、内江（分流）に２分した魚嘴こそ、李冰の智恵と勇気の結晶の場所である。彼の名は宇宙と共にこの地に留まり、その功績は永久に竹帛に垂れ、見る者に畏敬の念を抱かすのであった。（魚嘴は即ち古堰）

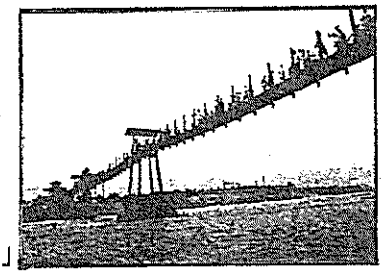
魚嘴から眺める内江の地勢は凹岸をなし、外江の地勢は凸岸をなしていた。このような地勢のため、少量の砂泥を含んだ表層の水は凹岸の内江に入り、大量の砂泥を含んだ水は凸岸の外江に流れ、自然に砂泥までも分類したのである。

このような理想的な地勢を選定し、堰堤を築いた李冰の頭脳の素晴らしさは、まさに神業と称賛しなければならない。その上、冬春の渇水期は内江６、外江４の割合、夏秋の洪水期は内江４、外江６の割合に分水している。

この分水堤の形が海上の巨大な鯨の嘴の形をしているから、後世の人はこれを「魚嘴」と名付けたと言われている。

古堰の跡を眺めながら内江の対岸に目を移すと、李冰父子を祀る「二王廟」の祠が、翠峰秀嶺の上に聳え建っていた。（４７頁地図参照）

二王廟の原名は「崇徳祠」と称し、南北朝の斉・明帝の建武元年（４９４）に創建され、宋の開宝５年（９７２）に重修して父子を「王」に封じ、二王廟と改称したのであった。



聞くと見るのと大違いの感じを受けながら引き返すことになり、再び吊橋を渡った。

この鉄索橋は宋代以前は「珠浦橋」と称し、その後「評事橋」と改称されたが、明代の末に戦火によって破壊されてしまった。

清代になって嘉慶８年（１８０３）、当地の「何先徳」夫婦が提唱して資金を集め、橋を造って「安瀾橋」と命名した。その後、夫婦の建橋の功徳を記念して以後は現在まで「夫婦橋」と呼んでいる。

乾いた砂が水を吸い取るように、目を皿にして李冰の知恵の跡を眺め、五臓六腑の奥深くまで感激しながら都江堰の観光が終わった。この偉大な事業の跡は今もなお、他のどこよりも強く私の脳裡に刻まれている。

（以上は四川省人民出版社発行の「旅游都江堰」を一部参考）

古代中国人の大自然のような大きな力は、転地療養したように私の心身に若さを与えてくれた。そして去り難い思いを残して乗車したバスは、都江堰によって発達した沃野を駈け抜けて成都市内に入って行った。

夕食はお別れ晩餐会をかねて由緒ある「文君酒家」で行われることになった。

（文君酒家の由緒ある歴史は２３頁の下段８行目から記述してある）

「旅は食い物くらい物」とばかり、酒が飲めない私は食べることを楽しみに「四川料理」の味覚に挑戦した。

料理とは「理を料（ハカ）る」と書くから、合理性の追求こそ料理の心であったが、四川料理の辛い食文化には馴染めず、辟易しながら口に運んでいた。しかし私にとっては、もっぱら中国に関する意見の開陳の方が楽しみであった。

１０月１４日 （木）晴 武 侯 祠（位置は４１頁地図参照）

明日も幸せな日がくると信じて寝るのが最高だと、昨夜は遅くなって床についた。今朝は三国志の心の古里の訪問だと目を覚ますと、何と幸運にも快晴であった。

出合いがあれば必ず別れがある。それを悲しむのは人間の本性だ。しかしながら再び「武侯祠」を訪れる機会に恵まれたことは、何という素晴らしい出合いの再現で、表現できない喜びであった。

６年前に鬼哭啾々として劉備玄徳の終焉の地・白帝城を訪れ、２年前に諸葛孔明が陣没した五丈原に登り、滂沱の泪を流す思いで「星落秋風五丈原」の歌詞を口ずさんだことが、昨日のように思い出された。

白帝城及び五丈原の紀行文には、それぞれ詳細にわたって関係記事を綴った。この紀行文では重複を避けるために補足的なものを記述し、劉備、孔明が「己の生涯を一つの夢」とみた死出の旅を偲びたい。

武侯祠の参観の記事の前に、魏・呉・蜀の三国志の時代の中国の歴史を補足する。

名目的に存続していた後漢王朝は、紀元２２０年、後漢献帝の建安２５年、魏の曹操の後を継いだ子の曹丕（ソウヒ）によって帝位を奪われて滅亡した。

曹丕は自ら皇帝となり魏王朝を建国した。この報を聞いた劉備は、早速、漢王朝の正統な後継者として成都で即位し、漢を名乗った。この劉備の王朝が歴史的に蜀漢、若しくは蜀と呼んでいる。

翌年には孫権も皇帝を自称して呉を建国した。孫権の呉は江南に勢力を伸ばす一方、劉備の四川と、曹丕の華北・中原は、大陸を３分割し、呉・蜀・魏の三国時代となった。（この時代の歴史書を三国志と呼ぶ）

それも束の間、劉備は子の劉禅〔幼名は阿斗（アト）、蜀の後主〕と蜀の将来を孔明に託して白帝城で逝った。劉禅は１７歳で即位して建興と号し、蜀を引き継いだ。

当時の中国の全土は１７州に分かれ、そのうち魏が１１州、呉が江南の４州、蜀は益州（四川・雲南地方）の僅か１州しか領有していなかった。

蜀の滅亡した時の蜀の人口は９４万人、魏は４４０万人、呉は２３０万人で、圧倒的に蜀の人口は少なかった。当時の農業は殆ど人力に頼っていたから、人口数が生産力に直接比例していた。いかに益州が天府の国であっても、これでは国家としてやっていけない。

蜀は人口の増加と生産の向上に懸命に努力した。孔明が南征したことも、南方の豊かな物産と貿易道の確保が目的であった。そして１万戸の異民族を蜀に移住させたのも、生産力の確保と兵力補強のためであった。

丞相（ジョウショウ、天子を補佐する最高の官位）の孔明は、蜀の安定と国力の増強に成功をおさめ、人心を掌握すると、魏に対する攻撃を準備した。

建興５年、孔明は皇帝の劉禅に「出帥の表」を奉呈し、魏討伐の決意を述べた。

【臣亮（リョウ、孔明の本名）言（モウ）す。先帝、創業、未だ半ばならずして中道に崩殂（ホウソ）せらる。今や天下三分して、益州疲弊せり。これ洵（マコト）に危急存亡の秋（トキ）なり】で始まる「出帥の表」には、漢皇室再興を名目に立ち上

がった劉備の遺志を継ぎ、魏を討つという北伐の決意とともに、皇帝である劉禅に向かって懇々と、皇帝たるものが取る態度について記している。

暗愚な主君（劉禅）を頂きながら、魏撲滅の兵をあげる悲壮に満ちた名文は、これを読んで泣かない者はいなかったと言われている。

孔明は劉備の遺児の劉禅を助け、宿敵の魏との抗争に全力を傾けたが、悲哉、２３４年８月、５４歳で五丈原頭において陣没した。

その後、魏の侵攻によって蜀が滅亡するまでの２９年間、愚暗な劉禅のもとで辛くも蜀国を維持できたのは、孔明の育てた人材のお蔭であった。

しかし孔明の後継者が暗殺されて劉禅の親政が始まると、失政がつづいて腐敗が蔓延した。魏軍が侵攻して成都に近づくや否や、劉禅は徹底抗戦を唱える家臣や、子の劉諶（リュウジン）を尻目に降伏してしまった。

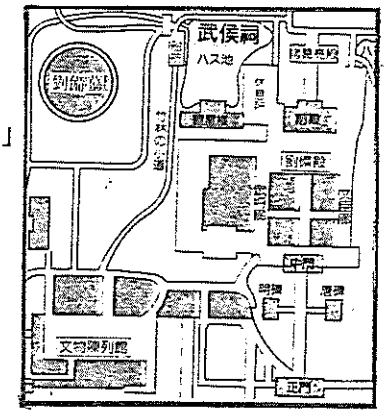
魏に降った劉禅は「安楽公」に封じられ、６５歳の長寿を保った。洛陽の宴会で蜀の音楽が流れた時、旧民が涙を流すなかで劉禅一人だけが、はしゃいでいたと言う。

だから中国では暗愚な者のことを、「阿斗」（アト、劉禅の幼名）と呼んでいる。

【参　観】

二泊した成都飯店を８時に出発し、平和な市街の西郊にある武侯祠に向かった。

車窓をおぼろげに眺めながら、平和の歴史の陰には必ず戦争の歴史があり、勝利の歴史の陰には必ず敗北の歴史があったと、五丈原や白帝城、それに我々が戦った戦争を思い出していた。



又、どんなに知恵があり権謀術数に優れた大人物でも、絶対に勝つことのできない敵がいた。それは「死」であつた、と戎衣をまとった若き日の戦場が浮かんできた。

色鮮やかな大樹や翠竹の緑に、赤茶色の牆壁が織りなす森に見惚れていると、バスは停車した。そこは武侯祠の森であった。（右は武侯祠の配置図）

唐の詩人の杜甫がここを訪れて、「丞相の祠堂いづれの処か尋ねん。錦城郊外、柏森森たり」と詠んだ通りの感じであった。

最初に目に止まったのは中央に龍を刻んだ照壁で、その後方にある狛犬を前にした朱塗りの門には、表面に「漢昭烈廟」、裏面に「明良千古」と書いた扁額が上がっていた。

「昭烈」とは劉備のことである。この祠は明らかに劉備の祠だが、世の人々は劉備以上に孔明を慕い、そのためにこの全域を、武侯祠〔武侯は孔明の諡（オクリナ）〕と呼んでいる。

元来この地には劉備の墓と、彼を祀る廟があり、孔明を祀る武侯祠はこの西方にあった。二人の死後１０００年以上も経った明の康熙１１年（１６７２）、君臣は当然合祭されるべきだと、劉備の廟に孔明も祀られるようになった。

現存する建物は清代に再建したものである。

正門から入った最初の建物は主殿の「劉備殿」で、気品のある黄金の劉備像が凛然ととて祀られていた。（前頁の下の写真が劉備像である）（前頁要図参照）

像の上の中央に「業紹高光」と書いた扁額が上がっていた。「業」は功績。「紹」は比べる。「高」は漢（前）の高祖・劉邦。「光」は後漢の始祖・光武帝。（右は業紹高光の額）

即ち劉備の功績は漢の高祖の劉邦や、後漢の光武帝に匹敵するという意味である。

さらに像の上の右側に「義薄雲天」、左側に「誠貫金石」の扁額が見えた。前者の「薄」は近づく（或は厚い）という意味で、「関羽」を表している。後者は「張飛」を表しており、それぞれの像が祀られていた。

劉備殿の前に据えられている「鼎」は、権力の象徴を意味していた。即ち、鼎の軽重を問うように、君主を軽んじてはならないことを表している。

劉備殿の左側の壁には木製の板に「前出師表」が刻まれていた。これは南宋の武将・岳飛の筆によるもので、今もなお人々にその名文を伝えていた。（右は岳飛の前出師表）

又、殿の右側の壁には、孔明の政治・軍事上の戦略思想として有名な「隆中対」の額があった。劉備が隆中にいた孔明を三顧の礼を以て迎え、天下三分の計をうけた記事が書かれていた。

不思議なことに、蜀の滅亡の際に妻子を殺し、自らも自刃した孫の劉諶の像は祀られていたが、阿斗と呼ばれた劉禅の像はなかった。皇帝の専制国家では、皇帝の能力が国の運命を左右したことを証明していたのである。

劉備殿の手前の左は「武将廊」、右は「文臣廊」の棟となっていて、蜀漢の国を支えてきた２８人の功臣の像が立ち並んでいた。そこにも又、「前出師表」の石刻板が黒々と輝いていた。（前頁要図参照）

（右は獅子奮迅の活躍をした１４人の武将像）

豪宏華麗な劉備殿を通訳の説明を聞きながら一巡し、そこを出ると劉備殿の後方が「諸葛亮殿」の武侯祠であった。私の脳裏に余韻嫋々として遺る五丈原を回顧しながら近づいた。（前頁要図参照）

諸葛孔明は生前から蜀漢建国の功績により「忠武侯」と諡（オクリナ）されていた。「武侯」とは漢中（今は陝西省だが当時は蜀国）の東方１２㎞にある武侯鎮のことで、武侯の由来は孔明がこの地に封じられていたからであった。

五丈原の丘の上の孔明を祀る祠は「諸葛亮廟」と称し、漢中には「武侯墓」と「武侯祠」があり、これらを参拝した私にとっては、成都の武侯祠は一層感激を新たにするのであった。

「我が棺は漢中の定軍山に葬れ」と言い遺し、乾坤一擲の戦いに挑んで神機妙算、その才その武その勇は、１８００年後の今もなお語り継がれているのであった。
（漢中の定軍山は兵を訓練したところで私も訪れている）

襟を正して諸葛亮殿に歩を進めた。「名垂宇宙」の扁額が上がった殿の正面に、眼は爛々とした光を放ち、莞爾として笑いを口に浮かべた孔明の像が祀られていた。
（右の写真は孔明を祀る武侯祠）

門には「両表酬三顧」と「一対足千秋」の聯詩が吊るされていた。前者は前後の出師表が三顧の礼に報いること意味し、後者は千年万年も恩に報いるという意味である。

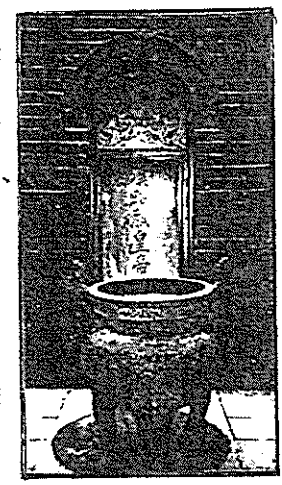
「桃李、言（モノイワ）ざれども、下自ら蹊（ミチ）を成す」（史記）の通り、我が身をかえりみず、国のために殉ぜんとした孔明を慕う多くの人々が、列をなして参拝していた。

【歌詞の意＝桃や李（スモモ）は実があるから、招かなくとも人が行き、その下には何時の間にか道ができる。即ち、徳のある人には自然に人が帰服するという意味である。】

歴史は一人の偉大な人物を中心にして動くのだと、万感胸を衝く思いで眼をめぐらせていた。殿の壁には彼の文章、業績を讃えた多くの額や聯が上がり、いずれも荘厳偉烈な文章ばかりで、そこには二人の孫の像も祀られていた。
（右の写真は凛々しい姿の孔明像）

彼が長駆した南征中に作ったといわれる「諸葛鼓」も飾られていた。昼間はこれで飯を炊き、夜間はこれで警報を発っしたと言われ、数々の事柄が永久に燦然として語り継がれているのであった。

諸葛孔明殿を通り抜けて左折し、赤い塀垣と鬱蒼とした緑に包まれた道を進んだ。行き詰まった正面に据えられた鼎の奥に「漢昭烈皇帝之墓」と刻んだ碑があり、「千秋凛然」と書いた扁額が掲げられていた。（右は漢昭烈皇帝之墓）



牆壁の一隅に設けてある門をくぐると視界が拡がり、鉄条網に囲まれた円形の墓塚が、秋霜烈日、神威森厳とした中にあり、「恵陵」と書かれていた。

白帝城で息を引き取った劉備、五丈原で陣没した孔明を祀る武侯祠の参観は、瞬く間に終わった。人の運命の残酷さを恨まずにはおられない思いで正門に向かった。

そのとき「故聖人之用兵也、亡国而不失人心」の辞が脳裏を走った。国を亡ぼせども人心を失わず、万世に及ぶという言葉は、我々年代の者にとっては金言である。靴を枕にして干戈を交えた私などには、孔明は心の宝石のような存在であった。

成都空港～上海

劉備の子の阿斗（劉禪）のことを考えながら、武侯祠の正門に待機していたバスに乗車した。武侯祠を訪れる大衆を眺めていると、晋書の「道傍の芳香」の諺が思い出されてきた。【路傍に沢山の実をつけた李（スモモ）があったら、それは必ず苦い李である。人間も同様で、相手にされなくなったら終わりだ、という大意である】

いつまでも軍師・孔明の才知と徳を慕う思いが冷めないまま、「漢方薬研究所」に案内された。中国の主要都市には必ず漢方薬研究所があり、変わりばえのしない漢方の講義を聞かされ、うんざりしていた。

漢方薬研究所から成都空港に直進して空港レストランで昼食をとり、１４：１０発の中国西南航空４５０１便に搭乗した。

１０日間も内外の情報から蟄棧敷にされていた私は、早速、隣席の中国人中年女性から、四川省発行の「参改消息」という新聞を拝借して貪るように読んだ。

旅立った時のロシア情勢は、エリツィン大統領と議会の対立は収拾されたものの、大統領の訪日は確定されていなかった。借用した新聞によると１０月１１日、エリツィン（叶氏）は日本を正式訪問し、天皇皇后及び細川総理と会見していた。

日本軍（自衛隊とは書いていない）は１０月１０日より北海道に於て、第１０師団３５００人が演習を実施した。

日本は新技術開発６項目を発表した。①信息技術（半導体）、②新材料和（和＝と）新加工技術（合成繊維）、③生命科学、④新能源（能力）、⑤宇宙開発、⑥国際協作

以上のように地方の小さな新聞にも日本の記事が掲載され、中国の日本に対する関心の強いことを証明していた。しかし、一般の庶民がどこまで理解できるかは甚だ疑問で、一方的な主張に引きづられる危険性は大と言わなければならない。

飛行時間２時間２０分、搭乗機は上海虹橋空港に１６：３０に着陸した。夕食を大富豪酒家でとり、自動車や自転車で輻輳する繁華街の南京西路から北京東路に進み、私の趣向に合った和平飯店に旅装を解いたのは８時を過ぎていた。

目睫の間に見える黄浦公園は姿を変えて昔の面影はなく、修理が終わった懐かしいガーデンブリッジは殷盛をきわめ、人と車の流れが欄干の灯に照らし出されていた。

これで１０日間の悠翔の旅に「錠」がおりた。やや寂しい感じがしてきた。個室の寝るような静けさのベッドに横たわると、出船入船の鳴らす哀愁に満ちた汽笛の音が、浜風に乗って鼓膜に伝わってきた。

１０月１５日（金）　上海（雨）～大阪（晴）

蓄積した疲労のために６時のモーニングコールは辛く感じた。７時半にホテルを発って上海空港に向ったバスの中で、親交を深めた通訳の「林松」氏と名残を惜しんで会話を続けた。彼とは峨眉山麓の紅珠山賓館で夜の更けるのも忘れ、胸襟を開いて語り合ったことが忘れられない。最後に唇歯輔車の関係にある両国は、「掌は二つなければ音がしない」という諺を、彼に贈って別れの挨拶とした。

搭乗機は１１：０５に飛翔し、１４：１５に大阪空港に到着して幕を降ろした。

あとがき

中国は広大な国土と古い歴史を有し、その奥行きの深さは際限なく、訪れば訪れるほど魅力を増してくる。春秋に富んだ時代には死線を越えて、激しかった中国戦線を渡り歩いた。こよなく大陸に憧れた私は天運あって今まで生き存え、戦後１６回目となった今次の訪中は、掛替えのない心に残る旅となった。

歴史は人間の苦闘の記録、古典は人間の英知の結晶、遺跡は生きた文化の遺産である。我々現代に生きる者は将来を展望する上で、過去の歴史や古典を学ばなければならない。旅はその為のものである。

顔は人生の年輪だと言われているように、文化遺産はその国ばかりではなく全世界の人類の年輪である。古きことは何の価値もなく、それを知る必要もないと貴重な文化遺産を破壊した、彼の「文化大革命」は実に愚かなことであった。

自然に私の足が引き寄せられて行った蜀の国・四川省は、中国有数の幻想的な遺跡の宝庫であった。その歴史の重みと人間の生きた知恵は私の脳裏に焼き付き、筆舌で簡単に語り尽くすことはできない。

中国仏教四大聖地の一つであり普賢菩薩の霊地である「峨眉山」、仏は山そのもの山は仏そのものと言われる「楽山大仏」、単に仏像ばかりでなく、お経の主題を物語っていた「大足石窟」は、私にはいづれも人間最大の関心事である、「不死」を暗示していたように感じるのであった。

「不死」は消極的には「死からの開放」を意味している。積極的には「生命の保存」を意味し、さらに積極的には「永遠の生命」「生命力の賦与」を意味しているのではないだろうか。我が命は子へ、子から孫へと継がれていく生命は「不死」である。

中国では仁政が敷かれて天下が太平になると、天は瑞祥として「甘露」を降らせると言われた。甘露はインドでは苦悩を除き、長寿を保ち、死者をも復活させるとされ、仏の教えの譬ともなっている。

数え切れない寺院や石窟、祠に掲げたてあつた言葉は、人間の知恵の教えである。私は聖地や遺跡を辿るうちに、それが「不死」「甘露」だと受け止めたのであった。願わざるに痛み、望まざるに老化していく我が身を思うと、それぞれの仏の里は私を啓蒙してくれたのである。

三国時代の蜀の知将・諸葛孔明を祀った各地の武侯祠を訪れている私が、今回、成都の武侯祠を参観できたことは、意義深く感じている。しかし、孔明に就いての感想等は五丈原の紀行文に語り尽し、更に付け加えることはない。

今次の四川の旅ほど精神文化に触れたことはない。文化は民族や土地の精神性を伴った伝統や価値観であると痛感し、我れながら充実した旅であったと信じている。

これからも、良寛が詠んだ「表を見せ裏を見せる紅葉」のように余生を送り、楽しんで淫せずに旅を継続できればと念願している。

喜びの中で楽しく送った旅も、今はただ一場の夢となってゆく。私は夢のまま終わらせたくないために、今回もまた自ら笑殺しながら夢幻泡影の駄文を綴ってみた。